

尾崎喜八資料

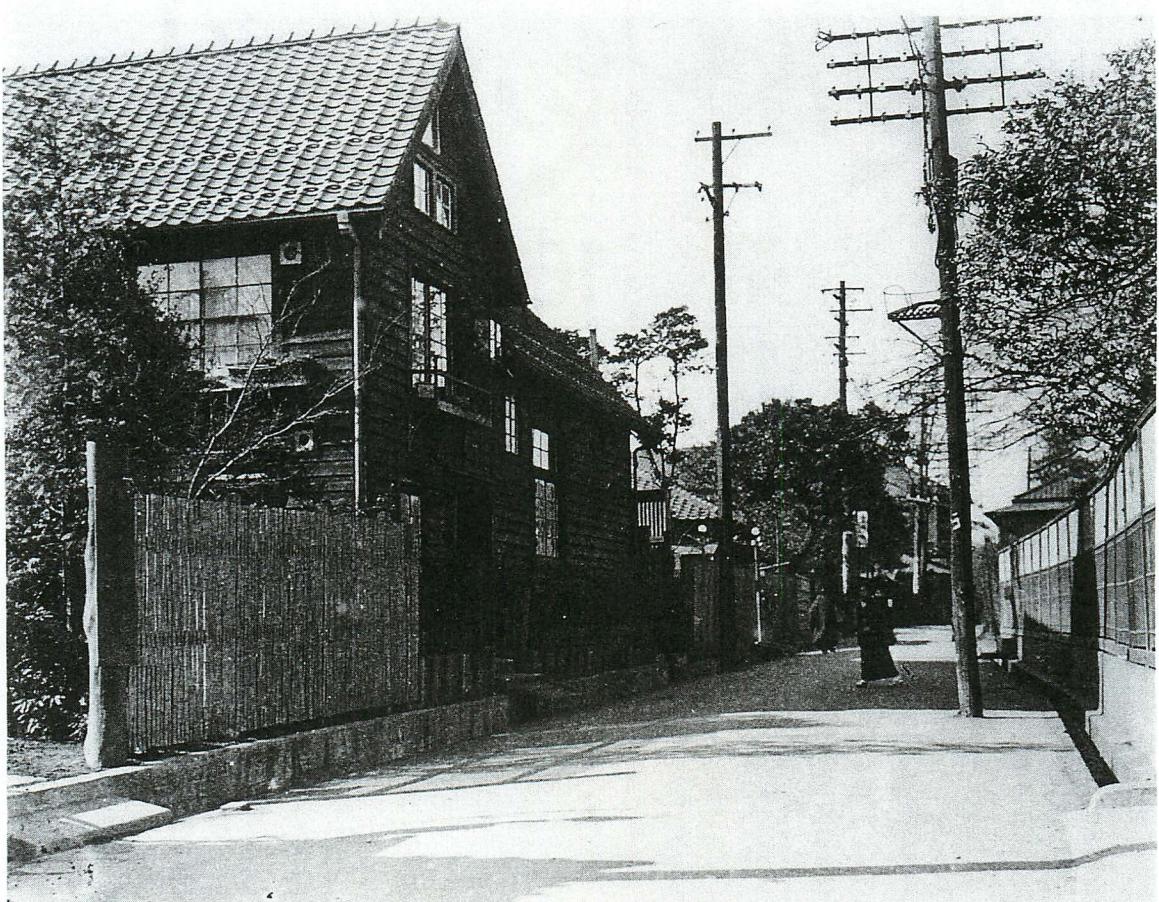
第 16 号

特集 尾崎喜八と高村光太郎 前編

林町のアトリエ	2
編集に際して／石黒敦彦	3
中年のおもかげ（抄）	4
愛と創作	7
高村光太郎論（島津謙太郎）	14
六月詩壇月評（抄）	17
新アスレチック	18
高村光太郎恭敬	19
手紙	19
昭和現代詩の鑑賞（抄）	21
きよらかな比例	22
「をぢさんの詩」研究	24
*	
尾崎喜八とフランスの作家たち その四／中原好文	27
一年のできごと／尾崎栄子	31
*	
表紙題字／草野心平	

尾崎喜八研究会

2000年12月



本郷区駒込林町 高村光太郎宅
昭和八年二月二十三日午後二時 尾崎喜八（撮）

林町のアトリエ

尾崎喜八

光太郎智恵子はたぐひなき夢を
きづきてむかし此所に住みにき

夫妻の住んでいたその家は、東京本郷駒込林町の静かな往来に面して立っていた。木造の洋風二階建てで、一階のアトリエがその大部分であり、彼らの生活の中心だった。周囲の環境が至つて静かであるように、二人暮らしの夫妻の動静もまつたくひつそりとしていた。夫はこのアトリエで粘土の彫塑にいそしんだり隣室の書斎で物を書き、妻もアトリエの片隅で油画をかいたり一階の日本座敷でいろいろな手芸にはげんでいた。世間の事に深入りをせず、卑俗をうとんじ遠ざけていたので、訪れる人達もそれにならって物静かだった。深い清福が感じられ、知性の空気があらゆる隅々までしみ渡っていた。それは此所に彼らを訪れる者たちにも或る種の感化を与えていなかつた。

よしんばやがて悲しく崩れ去る運命であつたにしても、「築かれたたぐひなき夢」の実現であつた事にまちがいはない。

（『日本詩人全集』付録9 昭和四十一年十二月）

特集 尾崎喜八と高村光太郎

— 前編・大正期から戦中まで —

尾崎喜八と高村光太郎

編集に際して（二）

石黒敦彦

十六号、十七号の二巻にわたり、いよいよ、尾崎喜八と高村光太郎についての特集を行うことになった。書簡、詩なども含めるとかなりな数になるので、今回は、大正初期から第

二次世界大戦の中、昭和十八年までの喜八によるエッセイを中心を選んである。編集に際しては、いつものごとく嘉納忠明氏の綿密な探索の成果に負っているが、氏の探索、編集構成とともに難渋をきわめた事情がある。それを説明することが、今回の特集の意図にもつながるので、以下にご報告したい。

当初は、大正～昭和初期の両者の行き来を、書簡、詩なども含めて、いわば「相聞歌」として構成する案が、嘉納氏との間で検討された。しかし尾崎の側のテクストの複雑な重複、再使用、加筆。そしてその度に加わる微妙なニュアンスの変化（昭和初期、敗戦後、昭和四十年代）が散見されることながら、この案は、本誌のような年鑑雑誌では難しく、採用できなかつた。

それを補う意味でも、次号「後編」では、嘉納氏にお願いして、喜八、高村光太郎、水野葉舟の三者の活動、著述、書簡の相關関係の「図表」を作成していたことを考えて、いる。大正十三年の喜八と水野実子の結婚生活の始まりを一つのピークとする大正～昭和

初期の三者の関わりは、豊穣であるにもかかわらず、限られた誌面で文献的に、時系列を追つて紹介するのがきわめて難しい。また、光太郎側の文献、書簡についてはすでに刊行を終えた『高村光太郎全集』（筑摩書房）において広汎に収められており、それらを再度ここで取り上げるのはためらわれる。それがために、おそらく「図表」という形式を選択せざるをえないと思つ。

もう一つの難渋の理由は、第二次大戦をはさんだ前後の、光太郎に対する評価の微妙な移り変わりにある。しかも困ったことに、前述したような、昭和初期にまでさかのぼる過去の文章の部分的な再活用、切り貼り、短い語句の加筆・訂正も、晩年に書かれた光太郎に関する「解説」にまで続いている。そのため、「大正・昭和初期・戦前・戦中・戦後・晩年」というふうに、区切りよく各時期を代表する光太郎観の変遷をご紹介する構成にはできなかつた。しかしこれは言葉を変えれば、出会いの当初からの、変わらぬ尊敬と友情を、喜八が光太郎に対して終生持ち続けたことの証とも言えるはずである。その意味で、長い文章であるが、最初期の告白小説的な習作「愛と創作」をもあえて掲載した。

それでもなお、時代の推移とともに変遷するものが、とくに昭和十七年の『詩人の風土』の「其頃」（本号収録「中年のおもかげ」（一）から十八年の「きよらかな比例」）あたりに、大きく感じられて、読む者に一種の驚きを与える。

中年のおもかげ（抄）

○編集部より——本文は、昭和初期に書かれたいくつかの文章をつなぎ、再構成した形で成り立っている。そのため編集部によつて初出の文章にしたがつてゴチックで(1)(2)としてある。

全集十八巻が滯りなく完結して記念の小宴が催され、その編集委員会も今日でいよいよ解散という日、別に大した手伝いをしたわけでもないがそれでもやれやれと思つた私は、つねに何かしら新規のプランを醸成させてゐる草野君から、つづいて出る『高村光太郎研究』のために光太郎の人間像というテーマで一文を書くようになつた。その頼みかたるや相変らず気前がよくて強引で、ひとたび満腔の信を相手の腹中に置くや、いつかなる厭とはいわせない性質のものだつた。

実を言うと私はこの際高村さんというものから少し離れたかつた。その回想や話題からこしづらく隔離して、純粹に自分自身の関心事を、今後ますます光彩あるものにしなくてはならない自分自身の創造の世界を、ようやく傾いた年齢の秋のひろがりを、ひとり静かに、深切に生きたかつた。それに個人の「人間像」などと、一芸術家を俎上にしてその魂や行為に精緻な分析や批判を試みるとなんぞ到底私のよくするところでもなけれ

ば、がらでもない。まして相手が高村光太郎という大豪で、大意識家で、難物中の難物とあつては、向う見ずだつた昔ならば知らず、今ではとてもおいそれと手が出せない。草野君と約束はしたもののは困つた。締切りの日が切迫するにつれて苦悶はいよいよ深くなつた。いくたびか書いては消し、書き続けては破り捨てた。そしてとうとう此の始末である。ここには人間像の名にあたつするものは全く無い。有るのは僅かに私の見た高村さんの姿だけである。それも数度の機会に書いて、すでに何處かしらに発表された文章の寄せ集めにすぎない。責めをふさぐにさえ足りないものである事は眞に申しわけのない次第だが、この際編者草野心平君と読者諸君とに格別の寛容を乞い願うのはほかはない。

(1)

高村さんの書くものは十九歳ぐらいの頃からときどき雑誌で読んで好きだつた。最初はたしか『文章世界』、『趣味』、『スバル』といふたぐいの雑誌だつた。その頃の高村さんは詩人というよりもやはり彫刻家、それに画家としての印象を多く私に残している。また批評にしろ隨想にしろ翻訳にしろ、当時の高村さんの書いた文章がおおむね造形美術に関したものだつた。『文章世界』に出た「粘土と画布」、「趣味」に出た俳句のついたイタリアの旅日記、「スバル」に載つた「出さずにしまつた手紙の一束」、「緑色の太陽」などを今でも記憶している。高村さんは碎雨という号を持つていたらしい。「方寸」という小さい美術

雑誌で左憂生という号で書いているものを読んだ覚えもある。時代はすべて明治の末から大正の初めごろのことである。

自然主義が文壇を風靡していた。もちろん文学とはなんら直接関係のない学校出たての若い会社員の私だつたから、何がどこを風靡しよう別に構いはしなかつた。月給を貰つて小遣いが潤沢だつたからしこたま本を買つてこんだ。鷗外さんのものは全部持つていた。『ふらんす物語』や『あめりか物語』の永井荷風が好きだつた。丸善へ行つてその頃流行のゴルキー、トルストイ、アンドレーフ、マーテルリンク、モーパッサンなどの英訳を買って来て辞書と首つ引きで読んだ。しかし花袋の『田舎教師』だか『蒲団』だかを何かのはずみで買った時は、読んだあとでひどく汚らしい物に触れた気がして、或る晩近くの永代橋まで持つて行つて隅田川へ投げこんだ。また同僚にすすめられて小説家なにがしの発禁の本を買つたところ、或る日留守のあいだに父に見つかつて庭先で焼き棄てられた。この焚書その事は大して残念とも思わなかつたが、それ以後父から警戒の目で見られるようになつたのには困つた。

とにかく、当時の日本自然主義文学にむしろ氣質的な反感を抱いていた私が、選択に自由な読者として、新鮮な外国文学に心酔したことは事実である。もちろん十九かはたちのその頃の青年の理解なのだから、外国文学を善しとする内容の程度にしたところで、同年の先輩、佐藤春夫や堀口大学の諸君のそれ

と大差は無かつたろうと実はひそかに思つてゐる。

しかし自由劇場第一回試演のイ・プ・センの『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』。これこそ最初の何物かであつた。私はあの時の私が身軽いを今でも覚えてゐる。後に鷗外さんが書いた小説『青年』を読んで、主人公純一が同じ芝居を見ながら、彼のうけた感銘といふのがあまりに稀薄で冷めないので、私はいくらか作者の鷗外さんその人に失望した。

また内田魯庵訳のトルストイの『復活』。それはもうエグゼティズムなどの関与して来る世界ではなかつた。それは安易な心、良心の麻痺、惰性的な生活意識への天の雷火だつた。私の理想主義、人道主義への火がこの時から小さく育まれた。

その頃からひそかに尊敬と愛との思いを燃やしていた高村さんの写真が、或る時「文章世界」の口絵に出た。髭の豊かな、ゴム合羽を着た半身像である。こういう顔はその時分でもあまり無かつた。私はこの顔に夜の東京の町なかで二三度出会つた。すべて冬だつた。ちょうどカフェー・プランタンというフランス風の料理店が新橋日吉町に出来て間もなくだつた。高村さんは寒中アイスクリームを舐めていた。今ならば珍らしくもなんともないが、その頃の私などは目をみはつた。また或る晩上野広小路でそれちがつた。かすりのひとえ物に夸をはき、古い麦稈帽子をかぶついた。雲が降つていた。

淡路町の中川牛丼店の隣りに、

琅玕洞ろうかんどう

という小さい美術品店があつた。それは高村さんが洋行から帰つて来て、弟さんにやらせた言わば画廊で、当時としては珍らしい店だつた。私は其處へときどき画やデッサンを見に行つた。高村さんの素描もあつたが高くて買えなかつた。或る晩その店の前の電車線路で高村さんとすれちがつた。私は思いきつて初めて言葉をかけた。そうして置いていち早く口実をさがし出して、外国の美術雑誌では何というのがいいでしようかというような事をたずねた。

「ステイデュー」というのがいいかも知れません。英語です」

そう返事してさつさと行つてしまつた。内に籠もつたような澄んだ声だつた。私は一人で顔を赤らめた。なんと私の声が震えてしづがれて響いたことだらう！

やがて「フューザン」という雑誌が出た。高村さんの名が出てゐるので買いそこなう事はなかつた。斎藤与里、岸田劉生、木村荘八などという画家と一緒に出した雑誌である。それは二号か三号で「生活」と改題した。このフューザン会の第一回展覧会のことは知つている人も多いかと思う。京橋角の読売新聞社の楼上では、後期印象派やフォーヴ派ふうの猛烈な空気が熱っぽく渦巻いた。十数人の青年画家たちの、噴きこぼれた魔女の大鍋のよくな画のあいだで、高村さんの白布の上の躊躇の静物が、ひとり涼しく懐かしく歌を歌つていた。一つの運動の起りたてには、その烈しい勢いのために玉石の質さえくらまされ

がちなるものである。フューザン会がやはりそれがだつた。岸田劉生はしかしごとに一頭地を抽いていた。私はカタログのパンフレットに載つてゐる高村さんの「さびしきみち」という平仮名書きの詩に深く心を打たれた。それはこれまでの高村さんの詩に無い清らかな光とあえかな匂いとにくゆつていて。

「フューザン」が改組して「生活」となり、すでに出ていた「白樺」の武者小路さん等が同人に加わつた頃の新鮮な芸術的雰囲気には、若年の局外者である私たちをも奮い立たせるものがあつた。しかし何よりも忘れてはならないのは、高村さんがその「フューザン」と「生活」とヘロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』の「叛逆」の一節を翻訳して載せたことである。

これこそ私にとって真に決定的な啓示だつた。これこそその瞬間から私の運命に一転機をうながすものだつた。ああ芸術！ 人がその一生を捧げるに値する芸術！ とうとう私はお前を見出した。芸術とはなんといいか！ そもそもかくの如く生きる事はなんとした。私は断然文学にこころざした。

私はロマン・ロランの名を初めて知らしめた人。それこそ我が高村光太郎であつた。

私は母を説き落として、『ジャン・クリストフ』の英訳四巻を、實に「生活」を読んだ翌日、丸善で買って酔うがよう帰つて來た。大正二年から三年、もう私はときどき駒込に高村さんをたずねていた。彫刻について、

詩について、私として考えればすなわち藝術の本質的な問題について、常に何かしら教えられて帰つた。或る時は夕暮れの雪が窓枠に白い花絨を懸け、ストーヴの太い松薪がぱちぱち燃えるアトリエで、高村さんの読んでくれるヴエルレーヌやボードレールを恍惚と聴いた。また或る時は自分のもつとも苦しんでいる心の上の問題を告白して、しみじみとした力づけの言葉を与えられた。そして大正三年十一月の或る日、高村さんが出たばかりの詩集『道程』を届けに丸ノ内の私の勤め先へ来られた時、私はその本を両手にささげ持つたまま、帰つて行くその後ろ姿を玄関の石段でいつまでもいつまでも見送つていた。

それから私は自分で詩を書きはじめた。見てもらうのは高村さん一人だった。いつでも「悪い」とは言わなかつた。いつでも私を容れ、私を見まもり、そして弱い時、駄目な時、よろめく時の私に、黙つて強く胸をかしてくられた高村さん！ この人無くば、私の運命はおそらくひどく變つていたに違ひない。

(2)

「そんなお宅へ初めて伺うんだから」と、白木屋から届けて来たばかりのすがすがしい夏の袴を穿かせられ、三橋堂だかの菓子折をあたらしく風呂敷に包んで持たされて「あんまり長居をしないように」という母親らしい注意をうしろに、電車に乗つて下町から山ノ手、酒の香のする京橋区新川から青葉にうずもれた本郷駒込の林町まで、今日こそ晴れて高村光太郎その人に会うことのできる嬉しさ恐ろ

しさにわくわくしながら、私の行つたのは明治が大正に改まつた年かその翌年の、たしか七月の事だつたと思う。

もつと幼い頃によく人力車で菊見に連れて行かれた団子坂。その坂の上から動坂まで、道の片側はほとんど樹々の茂つた庭園のへり

ばかりを見る閑静な通りの左側に、塀もなければ門もなく、往来からすぐ下水をまたいで四つの段々。其處からいきなり狭い玄関口が

洞穴のようにあいている高村さんの新築のアトリエだつた。鍵のかかつた入口の厚いドアと、白金巾やビロードのきれを中から垂らし

た左右の小さい深い窓。その小窓の下の足も

とには、靴の泥落としかと思われる弓形をし

た薄い鉄枠が、赤い煉瓦敷に堅くしっかりと嵌めこんであつた。そしてその後もめつたに

開かれたことのない大窓をもつこの南京じたみ渋塗りのアトリエの、これも同じ往来に面した右手裏木戸のすぐそばに、後には惜しくも伐られてしまつたが、一本の櫻が亭々と立ち、その灰褐色の太い幹やこんもりと茂つた夏の葉むらが、このアトリエに田舎びの健やかさと氣品とを添えていた。

青空の雲のようになり去り消えた四十幾年むかしの夏よ！ さすがの高村さんも三十そこそこ、近くに実家のあつた中条（宮本）百合子もまだうら若く、如來さんの娘関鑑子も向う横丁の崖の上の家で、ほんの可愛い少女の年ごろであつたろう。ともかくもそれぞれの人者が知らずや、此處でもまた未来にむかつて各自固有の運命を紡いでのいた駒込町の

物しづかな屋敷町に、思いのほかに染物屋があり植木屋があり煙草屋があり、若い彫刻家・詩人（がほのぐらいアトリエにひつそりと住んで、不忍川の低地をへだてて上野・谷中の高台をむこうに、あたりはにいにい蝶や油蟬の歌だつたような気がする。

色白の顔に油氣のない房々した髪の毛、鼻の下の厚い髭、背が高くて骨格の逞しい主人にあい、そもそも通された広い薄ぐらいた画室のなか、ところどころに濡れたきれで被われた彫刻台が立ち、たしか光雲翁の大きな胸像があり、十数枚のキャンバスが重ねて壁によせかけられ、左手奥のほうに水道の蛇口のほうに光る立流し、こちらの隅に厚いごわごわな袋へ入つた一挺のチエロ、壁の腰羽目に作りつけの腰掛けと緑いろの綸子の座布団、ブロンズの小さいカーライル像や数点の古い工芸品のならんだ棚、ジャワ更紗を投げかけた籐椅子や肱掛け椅子に時代のついた低い茶の卓、さては大きな鮪か何かの脊椎骨に似せて刻まれた南洋酋長の黒ずんだ長い杖など……そういうすべてが重たく手づよく分厚にできていて、人間の手工の貴さやおもしろさを思わせる「物」の調和世界をなしてゐる此のアトリエなるものの光景は、其處にはのかに立ちまようテレピンの香や粘土の匂い、更に何か知らぬがえならぬ香氣のただよいと共に、隅田河畔の下町商家から來た私と、二十歳の若者の心や感覺を、驚かせたり魅惑したりするのに充分であつた。

何か知らぬがえならぬ香氣……それは品よ

くなまめいていた。とまでは言わないにしても、ほのかに敏感な鼻を襲つて何となく女性をおもわせるものではあった。しかし、言つて置かなくてはならないが、その時はもちろん、またそれから暫くの間も、私はやがて智恵子夫人となつた女人の存在については全く何も知らなかつた。親しんで狎れようとしたい隔ての感情と或る羞恥の気持とが、他人のすすんで語ろうとしたい事柄への好奇心の動きや、はしたない臆測や詮索の興味を私に禁じた。

他人の私事にうとい私、たとえ眼は誰におとらずよく見えて、その自分の眼の見ない物まで見たように思いなすことを拒絶する私は、智恵子さんについてはもちろん、高村さんという月の裏側の消息についてもまたいちばん無知な一人かも知れない。

その日私は三十分か一時間足らずで辞去したが、高村さんは茶をいれてくれる時のほか

は終始袴の膝に端然と両手を置いて、結局は

文学で身を立てたいという私の親にも話さない打ちあけをじつと聴いてくれた。そして自分としては君の志望に対してとかくの批判は慎みたいが、芸術の道がどんなにけわしく、芸術家の生活がどんなに困難なものであるかを思えば、むしろ何不足ない実業家の子息として、しかも一人っ子として、両親もそれを期待し君自身もそのための教育をうけた実業の道へ、芸術に対するのと同じ熱情と信念とをもつて向かつて行くことを奨めたいと言つた。しかしもしも今後君のその熱望がいよいよ

よ燃えさかつて、芸術以外の世界ではとうてい生きられないという時が来たら、それこそ君の運命だから喜んでそれに従うがいい。いずれにもせよ、何よりも大事なことは、自分の内心の声に聴いて決しておのれを偽らないことだ。親に従うにせよ背くにせよ、家の業を繼ぐにせよ捨てるにせよ、それが必ず自分の本心からでなくてはならない。内心的声こそ運命であり自然である。この運命であり自然である道を進むとき初めて悔いのない生活の自覚が得られる。しかし自分としては君がなおしばらく現在の道を行くことをすすめた

い。豊かな心と賢い知恵とで、おもむろに君の運命を養い花咲かせるがいい。……
高村さんは大体こういう意味の事を言つてさとしながら、私がその『モンナ・ワンナ』や『アグラヴェイヌとスリゼット』を読んでいるマーテルリンクに、『知恵と運命』という深く美しい本のあることを教えてくれた。私は感動で胸がいっぱいになり、酔つたような氣持で外へ出た。外は晴れやかな夏の午後の光りと空気だった。やがて夢見心地がはつきりと覚め、軽くなつた心がはばたいた。そしてあんな立派な人、あんな慕わしい人、あんな実例がある以上、どうしても芸術家にならすにはいられないと心に誓つた。

（筑摩書房刊『高村光太郎と智恵子』草野心平編／昭和三十四年四月）

（1）は、「其頃」（詩人の風土）昭17）を推敲し
た文章である。

尚、文末の次の文章が削除されている。

高村君については一生のうちに真に書きたい。それは私の大切な仕事の一つだ。其為には手を洗はなくてはならない。もつと人間にならなくてはならない。

しかしこんな回想でも書くのは今日が初めてである。余り私事に亘った点については読者諸君の寛容を乞ふのみである。

（2）の前半は、「初めて見たアトリエ」（『私の衆讃歌』昭42）に相当する。
（嘉納忠明）

愛と創作

（此の一編を長與善郎兄並に我が隆子に）

室の中は静かだつた。絵を見る人は四五人しか居なかつた。皆足音をさせるのも遠慮するらしく、併し眼を輝かして掛け連ね一枚々々の画布の前に立止つて居た。暖炉は平和な呟きを洩して戸外の寒氣はこゝ迄は襲つて来なかつた。

百枚に余る画布は凡てその処を得たやうに落着いて居た。そこには官設展覧会に見るやうな死物の混乱はなかつた。生き生きした生命の凝視があつた。呼吸をのむだ氣魄があつた。真摯な空気が見る人の胸を圧した。その圧迫する精神は眞に充実した生活の痛い快感であつた。或る森厳さが見る者の心に破裂し切らぬ感情の苦しさを与へた。叫ぶ事の出来ない昂奮が此の静けさの内に音もなく渦巻く生命的流れを渦巻かせて居た。

それは陳滯しきつた日本現代の絵画界に最

初の烽火を上げた新しい書家の展覧会であつた。それは反逆であつた。古きもの、墮落したもの、そして芸術の仮面を以て日本の絵画界に跳梁する者に対する反逆であつた。権威ある如く見ゆる多勢の者に、若き少數の人々が挑みかかる反対の旗幟が若し反逆と呼ばれるならばそれは明かに反逆であつた。何となるべば彼ら少數の芸術家は、多年平和の逸民であつた觀衆をおどろかし、虚偽の芸術にその権勢を独擅して居た所謂老大家や、その追随者なる群小画家に向つて最初の火蓋を切つたからである。それは眞実の為めの戦ひであつた。そして虚偽なるものが一世を支配する時一人眞実の鉢を提げて立向ふ天才が蒙る反逆者の名を彼等少數の者は邪道にあつて邪道を知らない芸術家や、彼等を庇護する民衆から冠せられた。その戦ひは身顫ひを感じしめる悲調を帶びて居た。そして民衆の内にあつて猶虚偽を憎む少數の者の胸に同じ悲壯さを伝へしめる。男性の気魂。男性の涙。男性の征服慾は彼等眞実なる芸術家の制作を通じて若き眞実なる觀衆の心中に電流の様にひざき渡るを押しつける程近く身を寄せて見て歩いた。

若き達雄は此の電流に心を顫はせながら次から次へといきをつめて見て行つた。危く爆発しかゝる昂奮の叫びを押へながら画布に顏百枚に余る画は僅か五人の芸術家の手になつたものであつた。その中の三人の制作を曾て既に知つて居た。彼はその三人の名を彼は二度許り見た事があつた。そして今此の充実し切つた制作を見てその進歩に驚嘆した。

D……と云ふ画家の或る肖像画の前に立つた時、彼は太い溜息をついた。「余りぴたりして居る。是こそ眞の肖像だ。所謂大家の中にも此の一枚にも比敵し得る肖像を描く奴が一人でも居るか」蒼白い二月の雪の日の光線を上から受けた肖像の前に彼は寒さと熱さの二つに顫ふ身頹ひを禁じられなかつた。彼は此の画家の性格の内に或る寒い厳肅さを見た。筆触、にも色彩にも、そして絵画全体に行亘つて居る調子の中にも。勿論そこには云ひ知れぬ愛があつた。併し余りの懐しさに我を忘れて縋りつかうとする時、その狎れ難い厳肅さに自ら耻ぢて身を引く者の感情がその時のみに彼の感じた感じであつた。彼は重圧するD……の意力に呼吸苦しさを感じた。

内にも眞実と力とを欲するものがあつた。それで彼は救はれて居たのだ。多くの青年が渴仰する感傷の誘惑から救はれて居る事が出来たのだ。

彼が此の愛すべき者を愛し得ざる悲しき矛盾を感じながらD……の制作を見終る次にはT……の十数枚の画布がD……のそれとは殆んど対角をなすまでに異なる色彩の豊かさを以て並んで居た。彼はその中の山岳を描いた一枚を見るや否や「是だ」と思つた。「是こそ今自分の欲して居るものだつた。是こそ自分が同胞だつた。此の筆触、此の温かい色彩こそは自分の欲して居た凡てゝあつた」。

一人眞実の鉢を提げて立向ふ天才が蒙る反逆者の名を彼等少数の者は邪道にあつて邪道を知らない芸術家や、彼等を庇護する民衆から冠せられた。その戰ひは身顫ひを感じしめる悲調を帶びて居た。そして民衆の内にあつて猶虚偽を憎む少數の者の胸に同じ悲壯さを伝へしめる。男性の氣魂。男性の涙。男性の征服慾は彼等眞実なる芸術家の制作を通じて若き眞実なる觀衆の心に電流の様にひゞき渡る。若き達雄は此の電流に心を顫はせながら次から次へといきをつめて見て行つた。危く爆発しかゝる昂奮の叫びを押へながら画布に顔を押しつける程近く身を寄せて見て歩いた。

若き彼の内には併し此の寒い程の嚴肅さは入り難かつた。彼はもう少し温かいものを欲して居た。其の時代の彼を迎へて呉れるものをして居た。彼の内から衝き上げて来る感情を優しさの手で抱き上げて呉れるものが欲しかつた。元より彼は厳肅を愛して居た。そしてそれが持つ至上の生命を知つて居た。併し明徹な線を欲するよりも、豊かな愛を盛る色彩を欲して居た彼は、デューレルよりもドラクロアを愛する彼であつた。D……の画が彼の内に或るものを目醒まし、警めたにも拘らず、尚彼の重苦しい圧迫と冷静な理知とは達雄をして同胞に対する様な感情を起させなかつた。それは彼が情緒を喜ぶ処から来て居るものであつた。併し彼の喜ぶ情緒は元よりヤン・チメンタリズムのそれではなかつた。彼の

そこには大地の盛り上る底知れぬ力があつた。大地の脹れ上つて出来た山の真実があつた。そしてその禿げた一部には大地の力の断層面が素裸に出て居た。濃い緑に覆はれた部分には見る者をひきつける山岳の寂寥と崇高感なく、しかも非常な確かさを持つて表現されて居ると思つた。そして自分の内に沸騰して居る形を具へない力がしつかりと把握され居ると思つた。彼は一枚／＼と見て行つたそしてその画家の自画像の前に立つた時彼は昂奮の極致に達して居た。

「同胞だ。そして友達だ。自分はこゝに自分を抱き上の手を見る。此の画家こそ自分の友とすべき人だ」。

内にも眞実と力を欲するものがあつた。それで彼は救はれて居たのだ。多くの青年が渴仰する感傷の誘惑から救はれて居る事が出来たのだ。

に手紙を書く事を決心させた。併し彼は此の躍り立つ感謝と歓喜の一方に恐ろしさのある事にも気が付いた。その点で彼は自分の未だ幼稚である事を知つて居た。彼は是迄殆んどあらゆる芸術家に対して個人的の交際をした事はなかつた。そして又、多くの日本現代の芸術家に知己を求める氣にもならなかつた。それにしては彼は少し成長しすぎて居た。そして彼等を軽蔑して居た。併し彼がT……に手紙を書きT……に会ひ度いと思つたその感情は極めて純粹に尊敬の念の発露したものであつた。そして尚此の芸術家の制作に現はれて居る處から察すると彼にはT……が喜んで彼を己れの画室に招じ入れる類の人である気がした。彼はその時の様を想像した。そして微笑むだ。彼の前に宛もT……自身が立つて居て彼の若々しい元氣ある、そして在りのまゝなる感情のあふれた顔を見て微笑して居る気がした。彼の心は此の喜びに一杯になつた。彼はあらゆる楽しい場面を想像した。そしてその想像の中に浸り入つた。

戸外には雪が降つて居た。併し高潮し切つた彼にとつて降りしきる雪も風も何でもなかつた。彼は一時も早く帰つてT……に手紙を書かうと云ふ欲望に駆られながら展覧会の硝子戸を押した。そして出がけにもう一度会場の中を振り返つた。そこにはD……の肖像が目に見えた。彼は一瞬の間寂しい気がした。併しそれも亦一瞬の間に消えた。

外は真白な雪景色だつた。彼がひろげる傘の下から巴の様に降りしきる雪片が彼の顔に

舞込んで当つた。街路も家々の屋根も積雪の中に埋もれて、その中を電車が冷たい響きを立て、走つて居た。彼は頭を下げ、傘を傾かせ雪とは全で違つた事を考へながら急ぎ足に歩いた。そして附近の停留所から電車に乗つた。

彼は自家へ入るや否や女中の畏つて挨拶するのも分からぬ程急いで自分の室へ入つた。家の内は静かだつた。両親は芝居へ行つて居なかつた。

「彼等には芝居が相当して居るのだ」彼は斯う思つて微笑した。併し喜悦と期待とに充たされて居た其の時の彼は日本の旧い芝居を見に行く両親に対しても軽い愛を感じて居た。

人々には人々相当の芸術に対する娯楽乃至満足がある。彼等に鋭い批判の力と眞実なもの愛する魂が缺けて居れば居るだけ、彼等を娯ましめ、満足せしめるものは多い。何となれば現世に於ても低級なるもの、みが広大な領地を持つて居るからである。センチメンタリズム。庸劣なるヒューマニタリアニズム。卑しき性慾描写の爲めの性慾描写。病的嗜慾を芸術の羅をもて覆へる悪魔主義。誤れる現実主義……

併しそれは眞の芸術ではない。そして斯の如き邪道に棲息するものは眞の芸術家ではない。彼等は弄ぶ感情を名付けて芸術と云ふ。概念を名付けて思想と云ふ。彼等はそれを以て得々として居る。彼等にとつて芸術は高尚なる遊戯に過ぎない。思索に於ても殆んど此の事が云へる。そして尚現代の彼等にとつては高尚と云ふ二字すらも適當しないのだ。彼等の書くものは醜業婦との恋であり、昏醉を喜ぶ奇形なる神経であり。詩化したる性慾であり、人間の庸劣から来る悲劇であり、外殻を撫で廻す英雄主義である。彼等の背景に人類はない。人類の運命もない。そして云ふ迄もなく一点の愛と雖もない。

達雄はそれをK・Tに見、H・Iに見、J・Tに見、S・Tに見、R・Nに見、G・Sに見、そして彼等の無数なる追隨者等に見た。絵画に於ても彼等の虚偽が現代をまよはしの地に導いて居る事を達雄は知り抜いて居た。彼等には愛がない。孤独に堪へ得る気魄がない。堅実なる思想の根底がない。偉大なる者を尊敬するハンブルな心がない。斯くて彼等はトルストイを嘘つきとし、ドストエフスキイをプロットの作者としストリンドベルヒを大いなる狂人とし、ブレーキを魔術画家とし、ロダンを現代の野蛮人とし、メーテルリンクを凡庸な思想家として耻ぢないのだ。彼等は實にいまはしき精神的悪疾に犯されて居る。ゲエテを以て云はしむれば、「その病の癒ゆるに非ざれば筆をとるに価しない」輩である。

何となれば芸術が人類に立脚し、人道に捧仕する處に於て初めて芸術であるからである。そしてそれこそは芸術の最初にして最後なる目的であるからである。人類の運命に立つものは寂しい。そして人道に對つて進む旅路は遠く孤独である。彼は寂寥を友とし、現実の

幾多の苦惱によつて肉体的にも精神的にも傷けられながら、創造の喜悦に力づけられ、遙かなる人道に足を進める。やがて来る肉体的死滅にその身を任せたために。併し彼の靈は永遠に亘つて人類の上に輝く。そはベートオフェンの所謂「苦惱を通しての歡喜」である。そして之こそは男子の一生を捧げて惜しからざる偉大なる業である。

此の考へが彼達雄の内に湧き上つて居た時、併し彼はそれが彼の理想の中にある過ぎない事を知つて居た。彼は思念の中にこそ勇者であれ、その生活に於ては決して勇者ではあり得なかつた。彼は手淫慣習者であつた。卑しむべき彼の行為は此の一点を以てしても彼の自信を破碎するに充分であつた。一方驚の如きヒロイックなる気魄に充されて居る時、他方に於て暗き性慾にその肉体、精神を消耗しつゝあると云ふ事、そしてその内なる衝動の暴威に勝ち得ずして醜き屈辱の地にまみれると云ふ事、それはなんといふ痛ましき矛盾であらう。そして彼が感ずる此の矛盾苦痛こそは、屈辱こそは、悔悟の念こそは彼が偉大なる人々の事業を想ひ、自己の使命の高きを思ふ次なる瞬間に於て、彼の内に性慾の勃發を感じ、此の衝動に勝ち得ずして彼の信念の痛ましくも裏切られる時、更に烈しく強く彼を責めざいなむのであつた。

卑しむべき自家逐情。彼は此の行為のはかなき歓樂から醒める時、茫然として自失したる彼自身を感じる。彼の全ては空虚である。彼の世界は此の時暗黒である。その暗黒の中

に醜くも蒼ざめて座つて居る自己を見る時彼は自己の生くるにも価しない者である事を感じる。そして自己の醜惡なる性慾を咀ぶ。併しそれは云ふ迄もなく彼の弱い叫びにすぎないものである。

「俺はもつと聖くなればならない。俺は精神的にも、肉体的にも、もつと健全でなければならない。俺の不健全である事は此の汚れた常習を見ても充分なのだ。人間が精神的に健康であると云ふ事、それは何と云ふ大いなる事であらう。余りに見るに堪へない暗黒から俺は自分で自分を救ひ上げなければならぬのだ。自己を救ふ事すら出来ないものが如何にして他人を、況んや人類を救済する事が出来やう。それは少くとも虚偽である。冒瀆である。そして一生をかけての事業に比較して何と云ふ耻づべく、唾棄すべき行為であらう」

彼は斯う悔いる事によつてその良心と勇気だけは盛り返す事が出来た。併し彼のいまはしき痴行の結果は明かに目に見えて肉体的に疲労を与へた。そして彼の精神すらも実はその肉体と同じく半ば眠り半ば醒めて居たのである。

併し今、その室に入つた彼は此の性慾を感じた。そしてどう云ふ文句から書初めやうかと悩むだ。

多くの青年がそうであるやうに、そして殊に青年の尊敬の念が一向であればある程尚更そうであるやうに、彼も自分の内にT……に對して殆んど盲目に近い信仰を持つて居た。それが為めに此の場合彼の内に群がる尊敬と

の多くの文士、画家達のそれと共に載せられて居た事を知つて居た。それで彼は室の一隅に積み上げられた雑誌の堆積の中から文章世界を引出してT……の住處を見出した。

「京橋区月島東仲通……」

達雄はT……の家が彼と同じ区の内にある事に不思議な暗合を見出して喜んだ。達雄の家は隅田川に面して京橋区の東北の突端が日本橋区の東の一隅に接して居る処にあつた。そこT……の家は彼の室のすぐ目下を流れる隅田川を越して右方に横はる石川島の河口に延長して東京湾に面する処にあるのだつた。そこは彼が少年の時から旧知の場所だつた。今こそ人家や工場が稠密して都會の一部を形作つて居るけれども、達雄の少年の頃は雜草の生ひ茂つた原野であつた。そして処々に小さな百姓家らしい家が点在して春は雲雀が高い空中で鳴いて居たものであつた。彼はよくバッタを捕りに行き、ダボハゼを釣りに行つた少年の日を思ひ出した。そして今、その追憶多き地に自分の尊敬する、そして自分の訪れやうとするT……の画室のある事をなつかしく思つた。

彼は書簡紙を机の上にひろげてペンを握つた。そしてどう云ふ文句から書初めやうかと悩むだ。

多くの青年がそうであるやうに、そして殊に青年の尊敬の念が一向であればある程尚更そうであるやうに、彼も自分の内にT……に對して殆んど盲目に近い信仰を持つて居た。それが為めに此の場合彼の内に群がる尊敬と

感謝との念があるがまゝに表白する事が唯一の事であるにも拘らず彼は自己の幼稚さをかくさうとした。彼は幾度か書き損じて幾枚かの書簡紙を癪癩を起して破り棄てた。そして遂に彼が心の中に組み立て、居た処のものよりも遙かに短い手紙を書き上げた。そしてそれは自己の幼稚さをかくさうとした、めに短くなつたものであつた。そして尚、そこには明かに幼稚さが現はれて居た。

何と云ふ愛すべき苦心であらう。併しそれ

は或る時代に於てのみゆるるべき事である。

何となればそれは奴隸的精神の一の変形だからである。先づ人は眞実であらねばならぬ。

他人に対しても、自己に対しても、在るがまゝなる自己を枉げてまでも他人の感情を慮る時、それは醜業婦の媚態である。彼はそれをよく知つて居た。それがために彼は屢々苦しんだ。

「此の突然の手紙はあなたを驚かせるかと思ひます。併し凡ての無駄が純粹な感動から出たものならばそれがあなたを傷けない限りであなたは私の此の無駄をも許して下さると思ひます。」

今日あなたや、あなたの友人の方達の展覧会を見に行きました。そして深い感動を受けました。日本にあなたの方の様な画家の居られる事を心強く思ひました。文壇に於て私は「S」の二三人達を尊敬して居ます。併し絵画界にあなたの方の居る事を今日程強くありがたく思つた事はありませんでした。それは今私にとつて一つの大なる刺戟であり慰めであり

ました。殊にあなたの絵を見た時、同属の中の同属である事を感じました。今でも今日の昂奮が私の中に漲つて居ます。何よりも先づあなたに御札を云ひたくて、そして私の尊敬を表白したくて此の手紙を書きました。

あなたの御住所は文章世界で知りました。

機会が来たら伺ひ度く思つて居ます。私の家はあなたの処からさして遠くない処にあるのです。返す返すも無礼を御許し下さい。」

彼は此の手紙を読み返して見た。そして直ぐ女中を呼んで出させた。

彼の心は喜悦に充たされてゐた。自己の尊敬する人にその敬愛の念を打ちあけると云ふ事の云ひ知れぬ喜ばしさよ！ 彼の純真な心は芸術家の優しき魂に流れ、その感謝と同情の温かい波は再び彼の胸に打ち返すのである。

そして彼の若き、青春の、燃える様な憧憬の念と、生長の欲望は静かにその芸術家の落着きと、愛の中に抱かれるのである。彼は此時真に生活の幸福を感じ、未来の彼を祝福する。彼は自己に生甲斐を感じる。そして凡ての苦痛に対つて彼の双手を上げて突入する勇氣を盛り返す。此の高き喜悦に於て、そして此の真理を愛する魂を把持して放たざる気魄に於て、彼はあらゆる物質を打ち棄て、も惜しまないであらう。彼は若い。そして彼の未来は遠い。彼は幻の様な未来の中に幾多の彼の姿を見る。そしてそれは限られざるが故に輝ける希望であり、幸福である。彼に向つてその未来が、明確に想像の中に示顯しないと云ふ事は恵みである。創造のそして生活の凡

ての自由が現在の彼に許されて居るからである。彼は若くして純なるが故に幸福である。

そして如何にもして生きんとする魂を有つが故に幸福である。そしてその生活に伴侶のある事に於て更に幸福である。そは取りも直さず彼を慰め、彼を力づける真理を慾する魂であるからである。

人は多くの場合に於て彼等が真に純粹であると云ふ事は難い。そして真理を愛する者であると云ふ事は難い。彼等は何かの原因でそ

う思ふ事、そしてそうある事を妨げられて居るからである。そは多く彼等が社会的訓練の洗礼を受け、そしてその濁れる空氣の中にあつてその汚濁を知らない處から来る。民族的偏執。伝統。社交。誤れる教育。

真理を求むるためには、そして真理に対つて邁進するためには人はあらゆる偏見をすてなければならぬ。若しくは彼は甦らなければならぬ。併しそれは多数民衆にとつては至難の業である。只、少数の者のみその為めに戦ふ。彼等の戦ひが、その戦ひの生涯が不幸なる民衆の中に真理に向つての憧憬の念を植つけ、悩めるものを慰め能ふが故にそは偉大なる事業である。天才者は民衆の奥底にひそむ魂の顕現である。そして彼は人類それ自身の姿である。彼の氣息は人類の氣息である。彼の叫び、彼の怒り、彼の恐れ、彼の涙、彼の喜悦、彼の愛は共に直ちに人類のそれらである。併し民衆はそれを知らない。國家はそれを知らない。現世はそれを知らない。それがために彼の生涯は悲壯である。そして彼の

受くべき迫害は酷烈である。多くの天才者の一生がそうであった。そして彼が人生を愛するが故に人生の上に瀕漫せる虚偽を憎む事も甚だしい。彼にとつて人生はよし憎惡的となりうとも決して嫌惡的とはなり得ない。そしてその憎惡も愛する処から止むを得ずして発するそれである。愛は一の真理である。民衆を愛せんとする意志と、真理を求めるとする意志とが矛盾し相対する処に彼の悲劇は生れる。彼は没落と高翔の二途に痛ましき争ひを経験する。

達雄は斯かる悲劇の一生を通過して輝ける永遠の愛に到つた幾多の天才を知つて居た。そしてそうなる事が彼の理想であつた。その理想を生かす方便として彼は創作の形式をとる事が自分に適して居る事を知つて居た。そして殊にそれが音楽に於てよりも、絵画に於てよりも、彫刻に於てよりも、文学に於て自分に適當して居る事を知つて居た。彼は文学の創作家にならうとして居た。併しそこには常に多くの人々の場合に起るやうな故障があつた。それは彼の両親の反対であつた。殊に彼の父の極端な反対であつた。彼はそこに悲しむべき親子の意志の相反を見た。そして悲しむべき運命の伏在して居る事を隠げながらに感じて居た。

彼の父は商人であつた。幼少の頃から商人の家庭で育てられ、商人氣質がその全てにしみ込んで居た達雄の父にどうして達雄の理想が理解する事が出来やう。父は彼を立派な商人に仕上げる覚悟で居た。そして達雄は父の

意志のまゝに商人になるために商業学校に入學して十八の春そこを卒業した。併しこの時既に達雄の内には創作家として立つべき意志が根を張つて居た。彼は父の商業である株式の仲買を嫌つて居た。そして商業と云ふ商業の全てを嫌つて居た。物質的利害に疎く、社交的会話に拙なく、数学的事務に興味を持つて居ない彼に商人たる事の不適當であつたのは当然であつた。その上彼は深く文学を愛して居た。それと同時に商人的根性を侮蔑するのが年々に根づくよう張つて行つた。彼は父の目をぬすみ、時には父に反抗しつゝ、読書し、制作する事を続けて居た。彼はその事で常に苦しむで居た。併しその苦しみも彼にとつてはどうする事も出来なかつた。彼は自己の眞の慾求を殺してまで父に屈従する事に我慢できなかつた。止むなければ独立する気で彼は居た。彼はやがて来るべき父との激しい争論の後の別離を予想して居た。併し尚そこには多少の余地のある事をも知つて居た。そして事実そこに余地はあつた。彼は廿二の春或る会社へ事務員として入つた。そして辛ふじて父との衝突を避けて居た。併し彼は元より読書する事も書く事も止めては居なかつた。彼は夕暮れ帰宅するや否や直ちに自分の書斎へ入つた。そして成るべく父とは顔を合さない様にして居た。達雄は何等かの機会があれば会社を止める決心で居た。その時こそ彼がその生家をはなれ、両親と別れる時であつた。何となれば彼の父は彼の遊んで居る様に見える

事を元より許さなかつたから。併しそれでも尚未だ彼等の間に幾分の余地はあつた。達雄は今斯かる日々に暮して居る青年の一人であつた。彼は自己の所信を貫くために、その父母と別離した天才の数人かを知つて居た。そして彼等の伝記を読む事によつて、自己に若し強い信念と、良心とがあるならばその苦痛にも堪へて行ける事を学び、力づけられて居た。併し彼にしても出来るならば無理にも斯かる運命に触れ様とは思はなかつた。又併し結果に於て、如何ともする事が出来なければ、即ち彼の取るべき途が別離か、服従かの二筋となるならば、断乎として別離の途をとるの外はないと思つて居た。全ては力の問題だ。それから先は運命だ。今は唯此の覺悟に止めておくの外はないと思つて居た。

彼は窓を開けた。雪は未だチラ／＼と降つてゐたが風は静まつて居た。対岸の景色は真白だつた。そして碇泊して居る二檣船も、汽船も、親船も、伝馬も、その表面と云ふ表面に白い雪をのせて居た。その中を隅田川は寂しく流れて居る。静かに。静かに……

河の面は夜の様にシンとして居た。一艘の動く船も見えなかつた。その中を丁度音なき音楽の様に雪は降つて居る。高い天空から無数の白片が或るリズムをなしして尽くる時なく。そして広い水面に落ちては消える。

く彼を抱擁する形容し難い感情であつた。それはセンチメントであつた一つ一つすべて行く過ぎた日の追憶であつた。掌にのせれば溶け去る果敢ない恋の記憶であつた。やがて来る恋の予感であつた。遠くに煙る未来であつた。それは夕べの野にたゆたふ晩鐘の余韻であつた。牧笛であつた。總て力に於て弱く、尚且人的心を魅する女性的感情のとりとめもない雰囲気であつた。

達雄はそれを確かに意識する事なしに此の雰囲気の中にひたつて居た。そして静かに、身を動かせば瞬時に破れたる様な微妙な世界にその思ひを漂はせて居た。

「自分は今独りである、独りであると云ふ事の如何に自由であらう。自分にとつてその思念を煩はす事は一つと雖もないのである。自分は自分一箇の絶対の主権者である。そしてあらゆる未来は自分に向つて解放されて居る。愛も創作も、凡ては自分のものである。閉ざされる天空は自分の頭上に開けて居る。そして此の想像の翼を駆つて無限の空間に飛翔する事の喜ばしさよ。あゝ自分は今独りである。そして自分一箇の世界に於て君主である。

併し彼の此の考へは彼が未来を知らない事によつて幸福であつた。痛ましき幻滅がやがて来る現実の相を彼に示さない事によつて幸福であり得た。斯くて未来が彼の前に真にその姿を現はす時、彼は初めて粉碎せられたる夢想を知る。そして彼はその運命の手の下に喘ぐ。併し彼に若し忍苦と不屈の精神と力さ

へあれば、その苦慘によつて尚更彼は鍛へられる事が出来る。運命の鉄床の上にあって彼は最もよき自己を鍛へ出されると共に、その室に於て益々堅固に、益々偉大になる事が出来る。そは悲痛であると同時に喜悦である。そこに天才と凡人との大なる懸隔を見る。

併し誰か未来の汝を知らう。そして凡人ですらもその未来を知らざるが故に希望を持ち得るのである。併し偉大なるものゝみ彼が現在の内に未来の一部を予想し得る。とは云へ

達雄にとつて尚未だ未来は漠然たるものであつた。彼はたゞ如何なる運命にも堪へ抜かうとする覚悟をもつて居るにすぎなかつた。そしてその覚悟を実現する力は彼がうくべき幾多の試練の度毎に彼自身のものにする事が出来るものであつた。

とりとめもない夢想から醒めて、彼は窓をしめた。その時雪は漸くやみかゝつて居た。そして冬の夜は早くも来た。彼は電灯をつけ机の前に座つた。彼は何とない喜悦に包まれて居た。そして此の喜悦を失はない爲めに、「F」と云ふ新刊の雑誌をひろげた。そこには彼が今日行つた展覧会の画家達の感想や翻訳が載せられて居た。元よりT……のものもあつた。彼はそれを熱心に読みにかかつた。彼はT……の翻訳を読んで居た。初めはその主人公に同感しつゝ熱心に読む事が出来た。併し読むにつれて彼は外の事を考へて居た。彼の頭は彼の考への中に働いて行つた。彼は何を読んでゐるかも意識する事なしに唯、或る力の彼の内に漲る事を感じて居た。それは唯、

力と謂ふよりも寧ろ創作慾であつた。更に寧ろ、彼が創作の前に必ず感じる一の渾沌たるコンポジションであつた。形なき大なる形であつた。彼はそれを統一し、その中心を摑めばいゝのだ。併し彼が此の渾沌たるもの、出口を見出す事はむづかしかつた。それは快い苦痛であつた。それでもどかしい喜悦であつた。鬼事戯であつた。彼はいつかはその流れの出口を見出す。それは適當の時期、即ちその水量が終に堤を破つて奔溢する時である。彼はそれまで待つ事に産氣づいた女の苦痛と焦燥と期待とを感じて居た。

その創作乃至感想を発表する爲めに達雄は彼が勤めている会社の中で数人の友達と回覧雑誌をやつて居た。その同人は会社の中でも最も彼の親しくして居る友達であつた。彼等はその公けの仕事の上からよりも寧ろ此の創作のために堅く手を握り合つて居た。そして事実彼が最も文学に就て理解あり智識をも持つて居た。そして当然の結果として彼は同人等の頭株であつた。彼等は毎月一回宛その創作、感想を出し合つては回覧雑誌にとちて居た。彼等は年齢に於て若くとも、その真摯な態度に於て活字を用ふる本職文士を軽蔑する程の自信を持つて居た。彼等は始終元氣よく話し合い、互いに刺戟し合つて居た。そして彼等の最後の目的も等しかつた。

達雄は今彼の内に群る此の渾沌たるもの、小説の形式によつて表現しやうか、脚本の形式をかりやうかと様々に考へた。そして幾度かその計画を裏返しては最もよき方法で表現

する事に頭を悩ませた。併し彼には未だその渾沌が熟し切らない為めに此の二様の形式の誘惑の間を際限もなく歩き廻った。

彼はたうとうたまらなくなつた。その歯痒ゆさにたまらなくなつて立上つた。

「どつちだつていゝんだ。どつちにしても是

がものになりきへすれば文句はないんだ。そして結局ものになるに極つて居る。時が来る。そうすれば内にあるものは自然内から突き破つてほとばしつて来るのだ。割れて来るのだ。それまで待て。それ迄待てばいいのだ」。

彼は尚部屋の中を歩きまはつた。昂奮し切つて居た。併しその昂奮の唯中に彼の頭の中を明日来るかも知れないT……の返事の手紙の事がちらりと過ぎた。彼は又気が変つた。そして急に障子をあけて河の彼方彼の家のある方を見た。雪は止んで居た。併し風は寒かつた。その冷たい風が彼の熱した頭には快く感じられた。闇の中にはの白い雪景色が見えた。彼はなつかしさに打たれた。そして長い間右手の暗い空の下灯火のまばらに輝いて居る月島の方角を見つめてぼんやりと窓によつて立つて居た。（未完）

（「エゴ」大正五年一月）

高村光太郎論

* 島津謙太郎

複雑な興味と最も多大な困難との対象である。それにも拘らず、この多大な困難の前にたぢろぐ事なく、若しも吾々が忠実な検討に己を打ち込んだならば、決して空しく酬ひられる事のあり得ない程、この芸術家は豊富に調和した人格の所有者なのである。

しかし与へられた頁は限られてゐる。彫刻家としての、画家としての、また翻訳家としての高村氏を研究する事は、同時に詩人としての氏を研究する上の最も便宜な三方面ではあるが、それは他日の楽しい機会に譲るとして、今は詩人高村光太郎氏を考へるだけに止めて置かう。

けれども私の一言したい事は、人々が高村氏の詩に接する傍ら、出来得る限り氏の翻訳にも親炙して欲しい事である。ロダンを、ホキットマンを、ヴエルハアランを、そしてロマン・ロオランを訳して常にその優秀な語学と、正しい理解と、惜しむところのない傾倒とを示された氏は、實に其人自身の詩的作品の中に、此等偉大な天才者等の精神を、幸福にも吸収して花咲かしめるのである。實際高村氏ほど自己の魂及び心に近い翻訳の対象を手に取る人は少ない。そして此の事は今世にあつて極めて珍重すべき例である。その殆んど無比な訳し振りと、原作者の精神の正しき理解とを加へて。

あの記憶すべき「道程」の出版以後、高村氏には詩集がない。そして私の知る限りに於て、新聞雑誌に発表された氏の作品は殆んど二十を越してはゐないだらうと思ふ。これは

氏の作品を愛する者にとつて恨みである。又たま／＼の発表はそれだけ吾々の渴を医しても呉れる。とは云へ卑賤蕪雜な詩の跳梁跋扈してゐる今日、いつも飽くこと知らず味ひ得る氏の作品に、容易な事では接せられないとなると吾々愛読者は不幸である。

余り好意の持てない「明星」が、たゞ一人高村光太郎氏の署名を持つ詩によつて光つてゐる。曾て氏は二度か三度新聞にその詩を発表されたと記憶する。その他は悉く「明星」である。所詮、雑誌「明星」の編輯者は、この詩人に本当の感謝を示さなければならぬ筈である。

「メロン」にしても、「丸善の女工」にしても、「クリスマスの夜」にしても、「深夜の洗濯」にしても、「かゞやく朝」にしても、「冬の送別」にしても、「五月のアトリエ」にしても、「落葉を浴びて立つ」にしても、常に其處には何といふ明るい理性、溢る、詩想、強い精神、そして重量と弾力と陰影とに富んだ言葉がある事だらう。凡そ美の要素で高村氏の作品に見出されないものは何一つ無い。そして其の要素がすべて破綻なき調和を保つて、必ず温雅な光明にひかりくゆつてゐる。總じて此の詩人の詩から受けれる感銘は、ありあまる空氣に満ちた大空と、柔かに波うつ地平線とから受けるものに等しい。其處にいさゝかの物惜しみもなく、毛ほどの下品もなく、寧ろ余り洗練された豊麗な旨味に、時々は多少の酸素が欲しくなる位である。

彫刻家であると同時に画家であり、詩人であると同時に翻訳家である此の芸術家は、その煥發する才能と天稟との研究に於て、最も

氏の志すものが、人格の極度の円熟、詩想の拡大し得る限りのユニヴァサリゼーションに在るやうに思はれる点である。それは氏の最近の作「落葉を浴びて立つ」に最も明白に現はれてゐる。それは曾て「日本詩集」に発表された「無為の白日」の延長、否、生長したものである。それは此の詩人の全幅の流露である。またその夢想の被ふところなき告白である。青玉のやうな秋の空の下、大水のやうな日光につかり、天然の豊富の象徴である桜落葉を踏みながら、詩人高村光太郎氏はそのイマジネーションの飛躍に全靈魂を任せ切つてゐるのである。

伝統ある文章語と云はず俗語と云はず、凡そ氏の手にかかる時、其等は全く新らしい氣息を吹きこまれて動いて来る。しかも吾々の日常語を生きくと詩に取り入れた点で高村氏の功績は大きい。曾て「米久の晩餐」「深夜の洗濯」等を捉へて氏の用語を難じた福士幸次郎氏は、今日抑も何をしてゐるのであらう。詩集「展望」にしろ、評論にしろ、福士氏が高村氏の用語を云々する資格を持つ事を、決して吾々に首肯させてはゐないと思ふ。

高村氏の作品を非難する言葉に「冗長」「云々がある。しかし其れは溢れるもの、溢れ出る力を知つてゐない人の、或は知つてゐるのみで体験した事のない人の、余り立派でない非難である。其等の人は、氏の綜合的世界觀、調和的生活への建設を少しも見てゐないのである。高村氏にとつては、日常のあらゆる些事が、^{ラグ}細部である。それは一箇の彫刻の

全体の一部を形作る面である。その構図に於て大規模であり、その表現に於て豊かに自由な氏の作品は、それが長ければこそ滋味が深い。論文とも云へば云へるモラリティーの説明である。しかもその説明が常に豊麗なりリズムの雰囲気に包まれてゐるので、どれ程長くても飽きる事が無いであらうとさへ思はれる。冗長？ 冗長とは内容が稀薄で、只徒らに縷々たるもの、事である。この包摂的エセティックの作品は、もしも余り短かければ却つて吾々を失望させるであらう。

日常生活の些事にも深い意義を見る詩人は、必然的にその用語に就て敏感であり、叮重である。それは其種の詩人の属性であるやうに思はれる。私はこの事の例を高村氏に見る。また少し違つた傾向を持つ人ではあるが、川路柳虹氏にもこれを見る。この人々が言葉を大切にするのは、ちやうど、人が、その所蔵の美術品を愛撫するのと同じである。私は何時か、何かの雑誌で、あの彫刻家ロダン先生が其の古代の小彫刻を、窓の明りでためつすがめつして味つてゐる写真を見たことがある。私には其の愛撫の感情がよく解る気がする。

川路氏の事は今は云はない。此の短かい評論の対象である高村氏に就て、言葉に対する氏の態度を示す便宜としては、こゝに一つの例がある。それは「明星」第一巻第二号に発表されたもので、「かゞやく朝」と云ふ、六聯から成るずいぶん長い詩の抜萃である。私は第二聯と三聯と四聯とを抜いて見る。

九月からかけて、

四十日あまり暗く降りつゞいた雨、
青だまのやうな東京の秋の空をめぢやくにし、

秋の木の葉のゴブラン織を憂鬱の色に塗りつぶし、
毎日、毎日、
果てしなく湿つぽいカダンスばかり聞かせてゐた雨、
あの雨がはれたのだ。

忘れかけてゐた日の光が、
窓かけを明けると、まばゆい強さに、
斜めに幅びろに機嫌よく流れ込んで、
白いシイツにつきあたる。
手にうけて握りたいほど、
活潑に飛びはねるまるで生きものだ。

たちまち私の心はおどり出し、
著物もそこへ二階の窓をあけ放つ。
こんな朝一人でゐるのがもつたいく、
遠い故郷に帰つてゐる人のことをちよつと考へて、

手をあげて合図したいやうな、
つい微笑して室のそこら中を見まはす。
おはやうと言つてみたいやうな気になり、
何から何まであかるく、
うれしさうで、

とんでもない奥の方のからかみの隅に迄、窓ぎはのバケツから反射する
お、太陽がまろくをどつてゐる。

苦心して耳馴れぬ言葉を作り出す詩人、あまり根拠の分明でないリズム論の目釘をしめす詩人、息もせかくと片言を飛ばす詩人、白秋民謡と珈琲店の女給仕への同情ぐらゐから民主詩とやらを書き上げる赤ら顔の詩人、そんな詩人の多い中で、この「かゞやく朝」の作者を持つことは吾々にとって至極心強いことである。すべて吾々が日常何の奇もなくすらゝと使つてゐる言葉でありながら、その言葉が言葉そのもの、固有の感じと正常な価値とを以て生かされてゐる。言葉のひとつが、それゞのニューアンスと重味とを失はずその上、今まで知らずして過ごして來た日用語の旨味を吾々にもう一度味ひかへさせる。まことに、詩に於ける言葉は、樂器に於ける絃や弓にあたる。それよりも樂器そのものにあたる。ストラディバリのどんな名器でも、これを取扱ふ音楽家によつては聴くに堪へぬ音を出さぬとは断言できない。高村氏は名手である。私はこの点、川路柳虹氏、荻原朔太郎氏等をもその中に入れる。そして其等の名手の与へる旨味の感じの、なんと各々ちがつたものであらう。しかし、日本に今後立派な文學が起るとすれば、その前提として、必ず立派な言葉の活きた使ひ手が、よい詩人が、その先頭に立つべきである。よく熟した日本語を活かして使ふ。これが正統文芸勃興の条

件の一つである。さういふ責任ある立場から考へると、言葉の使用法に多少朦朧の嫌のあら荻原朔太郎氏はどうかと思ふ。けれどもそれはいい。通過しやう。

私は此の高村氏を個人的には知らない。従つて氏がどれほどの数の作品を作られてゐるのかそれも知らない。けれども、氏の作品の発表は殆んど「明星」に限られてゐるやうに思ふ。それも必ず毎月の期待は許されてゐない。この事は私にとって、又私のやうに氏の作品に高い価値と強い愛着とを感じるものにとつて、いつも大変残念な事柄である。氏は至つて潔癖の人であるやうに聞いてゐる。それはおよそ氏の書くものによつてもうかゞはれはするが、立派な作品がさう多いとは云はれぬ現在の文壇で、少しでも多く立派なものに接したいのは吾々の願である。作品の発表。その事は芸術家にとつては第二義に属するものであるかも知れぬ。しかしそれにも場合がある。野口米次郎氏、川路柳虹氏等の活躍されてゐる詩壇に、もしも同じ程元氣な高村氏の姿を常に見ることが出来たならば、それは詩壇にもう一本の幅広な運河の現はれたことにはならないだらうか。今、詩壇は余り放縱になり過ぎてゐる。悪いリアリズムに跋扈されすぎてゐる。そして尚云へば、言説をなすのは多く若い人々で、実力や過去の背景を持つ人は手を高閣につかねて微笑してゐるのみである。しかも眞に善き藝術のために精進してゐる者達は、吾々は、詩壇の囂々者流の又その下に埋没されてゐる。もしも氏及び二

三の実力ある詩人が、余り吾々に冷かで過ごされるならば、吾々は又別に一派の勢を作らねばならない。なぜかと云へば、この共通する善き魂のそれゞが、余りかけ離れて永年をすごせばさう成る事は必然だからである。

とはいへ、高村氏への期待は中々大きい。

それは吾々の持つてゐない大人の世界への期待の大きさである。今、日本で何人大人らし

い詩を書く人がゐるか？ 五指を屈するに足りぬ私ではないか。「詩とは何ぞや」が問題になつてゐる今日、民族の将来のため我国の文学を正しきに導く程の詩人が幾人ゐるであらう。

高村氏は、望むべくば其の一人である。その魂に於てあれほど眞に民衆的な、たのもしい、明るい、そして其の情操に於て高貴で堅固な

此の詩人にして、いつまでも其のパルナッスの丘を降りて巷に出ないとすれば、ホキットマン、ヴエルハアラン等の氏の無敵な名訛も、

結局は、単に未来ある者達への、あまり自己を空しくした贈物になつてしまふであらう！

今、旅にゐて忽忙の間に書いた。一々の引用にも準備が無い。たゞ古い「明星」一冊を傍らに、理解と敬愛とを傾けて、敢へて無名な青年の妄評を試みたばかりである。

(東京新橋旅舎にて三月卅日)

(「詩聖」大正十二年五月)

*島津謙太郎は尾崎がこの文章の為に用いたペネームである。(編集部)

六月詩壇月評（抄）

「詩の批評は」あの渾沌として繚乱たる情緒の持主、またあの雄大にして摸糊たる博識の人、わが福士幸次郎氏に従へば、「美事中の美事である」とは云へ批評家が単に冷やかな指先で他人の作品を解剖しいぢくり廻すだけではなく、況してや御座なりを云ふだけでなく、其処に思はず知らず一箇人としての意見を曝露し、次第に熱して来る姿のまゝで突立つ時、美の標準のまちまちでだらしの無い今日彼は己の自身の信仰の如何に万人のそれと選を異にし想を異にしてゐるかを認めて、がつかりするだらう。あんまり裸になり過ぎた自分に對して怒るだらう。また馬鹿の一つ覚えのやうな芸術家に対しても、その熱心だけを同情すれば、反対に、厳格に過ぎた自分の批評を却つて後悔するに到るだらう。然らば敏感と同情と、信念と精神と、心臓と魂とを持つてゐる人間にとつて、自發的でない公の批評くらゐ苦痛なものはない。まして、今月はよしとしても来月はどんな愚劣なものを発表するとも知れない氣紛れな詩人の多い時代に、何をめあてに真剣な心を動かさうとするか！あゝ、凡そ此等の事は慰めなき事柄である。

しかも何處かの会員の一人として、割り当てられた義務は果たさせねばならぬ。あすは忽ち忘られるかも知れない月評の筆をとらねばならぬ。私は本来の自分を匿さうか。否！

頭匿して尻匿さぬ不体裁を屢々私は演じて來たのだ。それなら度盛りを縮めるか。馬鹿な！私の良心はメルジーネぢやない。あゝ、願ふべくはなるべく多くの他人に読まれない事である。少くとも私自身の作品に同感も興味も持たないやうな選ばれた人々に読まれない事である。これこそ今私の主張し得る唯一のものだ。實にそれでいい。たゞ、私は信じてゐる。Le temps Vlenda! 日本詩人、太陽、新潮、明星。これが私のルビコンである。

高村光太郎君には「鉄を愛す」と「とげとげなエピグラム」とがある。

彫刻家詩人は其の仕事場で友達と向ひ合つてゐる。大窓の外、桜若葉の下道を、梅雨まがひの晩春の雨が風を封じてしづかに濡らしてゐる。こんもりした暗さを含んでたどたどしい明るさの飽和したうす緑の夕暮の部屋で、友は、何が結局死よりも恐ろしい幻影を持つかについて、彼の心の遍歴と新らしい門出と話をさうとするのである。Mait! それならうしろの暖炉の上の、瘞鶴銘の下のところにかくれてゐる鉄の燭台を取つてくれ。その告白を聴くために、明けひろげた青い窓の雨の近くへ、金でない、ギヤマンでない、いぶし銀でない、この黒がねの燭台の小さなあかい火を置かう、と云ふのである。

古金屋の物置にありさうな物だが、まあ埃を拭いて此の分厚な檻の台の上にのせやう。

むかし鎌倉のさかつた頃、刀の地金のあまりで鍛へた一尺ばかりの角鉄。上に茶碗がたの鉄皿をのせ、下に大きい鉄盆を伏せ、何とあたりまへで、手丈夫で、物ともしないで、黙りこくつて、吸ひ込むやうに深いのだ。黒くさびて、鑄のかどから地肌が出て、荒れ果てながらねつとりして、鋭い角に聳えながら奥のあるやはらかさに光をつゝみ、投げ出したまゝの魂にいきづくこの鉄の燭台に火をともさう。

(三聯の第一聯)

すべて抜き差しならない、鍛へ上げた心の声がそのまゝの言葉となつて、かつちりと嵌まるべきところに嵌まつてゐる。各一行が重圧されたエネルギーを含んで、全篇を高くサスペンドしてゐる。ケーデンスの終りはいつも鐵の燭台になつてゐるが、それが橋梁の支柱のやうに拱門をなす間の各句を錯落と懸けわたしてゐる。手法の冴えは云ふまでもない。君臨してゐるのは黒がねのやうな意志の強さ、その縁辺を刻んでゐるのは豊富な理想と情緒とである。題材も此の作者に凡そぴつたりしてゐる。ありあまつた実力が主題を極度に緊縮させてゐる。呼吸は深く、鉄床と鉄柵とはかんかん云つてゐる。總じて此れほど濃厚緻密で堅固な詩を近來私は見た事がない。ハンマークラヴィールかゴチック祠堂の美である。

「とげとげなエピグラム」の一つが云つてゐる。

大変い、けれども、
けれども感心しない、なら、

君は

おれと一番縁の遠い魂だ。

(「日本詩人」大正十二年七月)

新アスレチック

濃淡種々の雲の塊りのやうな、ばくばくとして暖かい緑のグラダシヨン。それは山岳の起伏だ。その美しい雲綱模様の中を川や渓流の水色の糸が、岩石の割目に食ひこむ根のやうに枝又枝に分れ、顛へ、縮れ、消えるかと見えては続きながら、遂には濃い緑の底に吸ひこまれる。又大抵は此の水色の線に沿つて屈曲する一層力強い二重線。それは国道、県道。そして此の二重線に或時は密接し、或時は遠く離れて走る黑白染分けの紐は鉄道線路。しかし此の緑一面のところどころ、鮮かな朱色の鋸屑をこぼしたやうに見えるのは、磁場の上に突つ立つた鉄粉の集りのやうに見えるのは何だらう。さうだ。それは町だ。生産と消費との中心、青いエスパスの下にちらばる人間の蜂巣、地方の都邑である。

これは地図である。陸地測量部の地図である。私は此の二十万分の一の地図が好きだ。

此の地図の持つ一種の雄大さと、その精密さと、単純で快美なその色調とが好きだ。私はその強靭な紙の質と、その新らしい爽やかな

印刷インクの匂ひが好きだ。カルトンから一枚を抜き出して畳の上へひろげ、眼をほそくして幾らか斜めに地図を見る。緑色の影線とぼかしとを以て紙の平面上へ印刷された山々の平面が次第に浮き上がり、拭いて取つたやうな薄青い海洋が遠くひろがる。紙はすでに紙でなくなる。これは飛行機の操縦席から見下ろした国土の一部であり、又雲と日光とが明暗の変化を与へる実際の大地である。地図を眺めながら、無限に湧いて来る夢や想像を私はよろぶ。

一枚のヴラマンクが、一枚のヴラマンクの水彩の記憶が、とつぜん、遠く出かける慾望へ私を駆り立てる。墨縄を打つたやうな、透視画のやうな、例の爽かな村道である。片側は窓へ暈しのついた例の白壁。片側は籠のはねた、外へ開いた桶のやうな例の堀である。鉋屑を巻いて其のとつきへ墨をつけて、無造作になすつたかと思はれる幾らかかされた直線が二三本。それが堀のはづれの樹木である。其の樹木の頭を包んでゐる綿のやうに軽い、ぼやけた新緑。道のつきあたりに出てゐる例のブルウの勝つた不安な空。此の不思議に明るく又暗い、嵐の前のやうに氣味悪くひとつそりして其癖日の当つた、残酷と云へば云へない事もない程に単純な又豪快な、風景の一断片。此の絵画の剛の者の水彩の記憶が私を何處かへ誘ひ出す。

ヴラマンクはヴラマンクである。地図は地図である。しかし私の中で、ヴラマンクと地図との間には何故か一脈肉親のやうな繋がり

がある。此の牡の画家はオートバイを飛ばして風景を探しに行く。その腰に発動機の雷を持つた此の凄まじい二輪車は、牡牛のやうな画家を載せて、一時間九十基米から百基米を疾駆する。

或時彼は詩人ジョルジュ・デュアメルを誘つてノルマンディーへ花盛りの林檎を見に行つた。ヴラマンクがオートバイを操縦する。デュアメルは彼のうしろへ跨がつて、「一座の山のやうな」彼の肩へしつかり摑まる。巴里の郊外とノルマンディーとの間を僅か三時間で往復した大速力である。

「私の眼の前を、林檎ではなく、何か知らぬが薔薇色をした白い壁のやうな物が飛びすぎた」とデュアメルは書いてゐる。

人から何と云はれても、私は夕立に遭ふあのサアニンを昔から氣質的に好まなかつたが、瑞西の山の中の小屋で、吹きすさぶ嵐と共に刻々と生命の力を取り戻してゆくあのクリストフを今でも私は好きである。私はアルツィバアシェフのサアニンが持つあの凶太い、脂くさい体臭には嘔吐を感じたものだ。私は其事で、高村光太郎君や高橋元吉と言ひ合つた事をよく覚えてゐる。十何年前の話である。あの人達にはあの人達の理由があつた。しかし今日でも私は自分の主張を撤回しようとは思はない。僕等のシユトゥールム・ウント・ドランクの時代をもう一度呼び返さうか、懐しい昔の友よ！

清廉の本質には多かれ少なかれ精神のアス

レチックの傾向がある。彈力のない、不活潑ないぢいちした独善の清潔家は、未だ清廉の真の消息を解する事は出来ない。そこで一人の詩人は書く――

あ、御しがたい清廉の爪は
地平の果から来る戌亥の風に研がれ
みづから肉身をやぶり
血をしたたらし
湧きあがる地中の泉を日毎あびて
更に銀いろの滴を光らすのである。
あまりにも人情にまみれた時
機会を蹂躪し

好適を弾き

たちまち身を虚空にかくして
世にも馴れがたい透明な水晶色のかまいた
ちが
身を養ふのは大洋の藍碧
又一瞬にたちかへる
あの山巔の気。

私は此の詩人が剛毅な、古風なモーリスダンスを好んでゐる事を知つてゐる。同時に彼が通俗の眼からは乱雑と見違へられるばかりな「物の豊富さ」を愛しながら、その精神のふところに、何時もニイチ工の晴れやかにも痛い「聖一月」の風を持つてゐる事を知つてゐる。

私は今三等列車の窓のそばの座席にある。汽車は東京西郊の幾らか憂鬱な、たけなはな

春を賣いて走つてゐる。光り輝く朝である。

私は列車が友達等の住んでゐる町の停車場を轟々と通過する時、心の中で佳い朝の挨拶をしながらサンドウイッチを頬ばる。東京を発

つ時には或る店で温室メロンの一片と、カリ・フォルニアのオレンジと、無花果とを食つた。しかし私の精神の飢渴は未だ癒やされない。これは信州松本行きの列車である。私は一つの山へ行くのである。ルックサツクの中には私を誘惑した地図がある。読めるかどうかは知らないが一冊のヘルマン・ヘッセがある。

(『詩人の風土』昭和十七年)

高村光太郎恭敬

高村光太郎は詩の澎湃である。その水の広袤たるや各の瞬間にあつて常に新らしく、常に眺めに豊かで、又常に「物」に満ちてゐる。新らしいのは彼がその源泉の止み難い汾湧に忠なるが故であり、物の充満は彼の内部生活の確実な富の多量と、その絶えざる認識の把握とを物語る。人は彼の藝術に面して飽るといふ事がない。

又彼の詩は遍漫である。日照り輝く秋の山

野に霏々として降る紅葉のやうに、詩の「無限」に生きる彼の詩は、人の捨て、顧ぬ境を

の奥の明るさを、健康な素朴を、素朴の絢爛を、選び又併せ享けるのは吾々に与へられた深い喜悅である。人は其處で自然の与へる解放と同じ解放の力を感じる。

詩に於ける「言葉の音楽」といふ概念は、彼の藝術へ来て初めて新らしい日光を浴びる。瞑々の間に永く許容されて来た朗誦風の詩的な言葉が、最早生きた現実の表現に適せず、十分に満ちた語感を持つ言葉を鋭敏に感じ取つて、これを有機的に活用するところに言葉による芸術家たる詩人の任務を見る彼は、一作品の生体の細胞とも云ふべきそれぐの一語を選びとるのに、各運指の移り行きの微妙な効果にその全感覺を傾注する音樂家の神経と良心とを以てする。詩に於ける言葉の音樂とは、言葉の生き生きした深い含蓄と音の調和との謂に他ならない。彼の詩は此の点吾々の研究に對して豊かな宝庫であり、詩の未来に対する極めて興味ある有益な暗示である。

「道程」が出てから茲に全十五年。其の間一冊の詩集にも纏められなかつた斯くの如き作品は、その大小長短を問はず、すべて貴重な資料、又溢る、滋味として集結せらるべきである。

(『現代詩人全集』月報4 昭和四年十月)

手 紙

この正月は恒例の「新年の山」へも出掛け

すに家に居て旧臘ジャン・リシャアル・プロックから贈られた彼の近著「政治への捧げもの」と、ジヨルジュ・デュアメルの「人文主義者と自動機械」の一冊を読んで暮らした。かうして僕は白馬や穗高の雪は見なかつたが、兎もすれば悪く主観的に、安っぽく、独り合点の地方主義になりがちな自家用の「世界観」とか「メタフィジック」とかいふ觀念的な代物に、現代歐羅巴の最もいきいきした、最も大胆な批判的精神の活動の実例を見せてやる事が出来た。僕は實際「これだ！」と思つた。僕が真に僕ならば、精神の格闘の舞台から逃晦して、口実は何とでもあれ、所詮興味からざるするに這入り込んだアマチュアの世界で高士になつたり哲人になつたり、カメラを持つた現代の隠士になつたり、童心に色氣をかくした聖者になつたりするなどは、安価な解脱、嗤ふべき自己欺瞞に過ぎないと思つた。僕の智識である爪の垢ほどの植物学、砂粒ほどの地理学が、よしんば僕の生活の或一面に或喜びをもたらすとしたところで、それはそれで、何も「喜びを通しての認識」だけが、昔は知らず、少くとも現在の僕にとつては、此世での認識の最も高尚なものでも無ければ福音でも無い。それは僕だつて登山も

かうして僕は白馬や穗高の雪は見なかつたが、兎もすれば悪く主観的に、安っぽく、独り合点の地方主義になりがちな自家用の「世界観」とか「メタフィジック」とかいふ觀念的な代物に、現代歐羅巴の最もいきいきした、最も大胆な批判的精神の活動の実例を見せてやる事が出来た。僕は實際「これだ！」と思つた。僕が真に僕ならば、精神の格闘の舞台から逃晦して、口実は何とでもあれ、所詮興味からざるするに這入り込んだアマチュアの世界で高士になつたり哲人になつたり、カメラを持つた現代の隠士になつたり、童心に色氣をかくした聖者になつたりするなどは、安価な解脱、嗤ふべき自己欺瞞に過ぎないと思つた。僕が真に僕ならば、精神の格闘の舞台

だから一生をかけて真理の探求にみづから捧げる自然科学者の仲間へ因々しく割込んで行くやうな事はしない。僕は詩人だ。あくまでも文学の野の人間だ。眼は広角度の視野を見るが、何と云つても今僕は人間の運命とされずの問題を問題として取上げなくてはならない。しかも僕のやうな者の前にさへ必死の問題は實に夥しく、又その関係は複雑を極めてゐる。何からどう手をつけていいか、それにさへ迷ふ程だ。折からメトオドの天啓のやうにプロックとデュアメルが届いた。此等の読書は僕に勇気と暗示とを与へた。即ち

Jean-Richard Bloch : Offrande à la Politique.

Georges Duhamel : L'Humaniste et L'Automate.

だが斯うやつて書物の原名を書くのは、詩人の残飯へ飛びついて来る例の餓狼のやうな紹介屋やリベラリストの評論家共への為ではなく、事によつたら買って読みたいと思ふかも知れない君の為だ。彼等については、僕は王朝仏蘭西の最後の太陽、あのコンデ公の有名な言葉を思ひ出す。「骨は大共に！」それに僕は此頃の八面玲瓈の批判家も嫌なのだ。何事にも好意ある関心を寄せてゐるやうに見せかける紳士的な善良な批評家をね。ところで「善良な人間といふ者は、しばしば卑しいな」と、約みたいなあのレオン・ウエルトがちゃんと前もつて云つてゐるよ。

さて、しかし、此手紙の目的は、こんな前置を長々と書く事では無かつた。君が「どう

思ふか」と云つて来た詩についての僕の考、年の初に際しての楽しい、切実な考を少しばかり書く事だつた。

「若草」新年号の高村光太郎君の詩「もう一つ自転するもの」、これは全く立派な詩だと僕も思ふ。詩に於て本来であり且つ独特なものであるところの言葉の魅力が實にここに瀰漫してゐる。

「春の雨に半分ぬれた朝の新聞がすこし重たく手にのつてこの世の字劃をすたずたにしてゐる

世界の鉄と火薬とそのうしろの巨大なものとが

もう一度やみ難い方向に向いてゆくのをすこし油のにじんだ活字が教へる

とどめ得ない大地の運行

べつたり新聞について來た桜の花びらを私ははじく

もう一つの大地が私の内側に自転する」

(全文)

実技的に見れば、この春の自然のやうな、温かくいきいきして胴体のやうに重く、しつとり濡れながら仄かに匂を吐く一篇の詩を読みながら、僕はその滋味を味ひ又味ひ返し今更のやうに日本語を有難く思ひ、同時に、仏蘭西で人がボナアルの色彩やヴァレリーの詩句に殆ど陶酔する事の出来る所以を理解し得る

ところで君は此詩の最後の一行の、「私の内

側に自転するもう一つの大地」の解釈について僕の意見を叩いて来たが此一行は曾てどこかの雑誌で面白い論争の題目にもなつたものだから、僕は此處で僕だけの考を簡単に述べて置かう。

一体高村君の詩的作品に長く親んで来た者にとつては、その運行をとどめ得ない大地と彼の内側に自転するもう一つの大地との対立関係が、すでにかなりの昔から彼の主旋律となつてゐる事が知られてゐる筈だ。彼が「無価値に生きて一生を棒に振る」ことに平然としてゐられる磐石の力は、彼が名利に恬澹であるとか、事に處して清廉潔白であるとか云ふ程度の處よりもと遠く深く、其根が、実に此の二つの大地の対立関係へのつきりした認識、彼自身のうちでの此の二極の交流・邂逅、及び彼の云ふ自然律への自己の形骸放下の北天のやうな醒覚の心境にまで届いてゐるところから生れるのである。彼に於て運行をとどめ得ない大地とは、星辰的宇宙でもあれば人類の世界でもある事実、宇宙の運動も世界の流転もそれ自身でとまる事は出来ないし、又何者かの外力も之をとどめる事は出来ない。宇宙の運動は措いて世界の運行について云へば、それは老ルナンが若いロマン・ロランに説いたといふ言葉の通りに人類の道だ。「人類の道はひとつの山路である。それは九十折に登る。それは羊腸を描いて進む」此の蜿蜒屈曲する路を真直にしたり縮めたりする事は到底出来ない。それどころか、「時には目標へ背を向けるかと思はれる一時期さへ

ある」しかし安心するがいい。「それにも拘らず人類は絶えず目標へ近づくのだ」これは深渊のうちに立つて動じない心だ。世界を一つの大きな幻影と見て、しかも窮屈の樂天観に眠る事の出来る眼だ。

僕は高村君が人類の未来に對して果して此のルナンの西歐的樂天觀を抱いてゐるか否かを未だ詳かにせず、寧ろ東洋の龍である老子の思想を此場合には嗅ぎ取るのだが、しかし一方、彼の内は側で自転する所謂「もう一つの大地」、喜んで天然の一片であり得る寧ろ彼自身、人間が無に等し來故に大である事を感じ、無をさへ滅した必然の瀧漫をよろこぶ彼は（「火星が出てゐる」参照）、「その充溢」と調和とを楽しみ、……一種永遠の要求から自分自身、神及び事物への認識を持ちながら、決して存在する事をやめず、魂の眞の平和を永久に持つ」といふスピノザの思想に通ずるところがあるのでないかと思ふ。

若しもそれがさうだとすれば、僕が高村君の詩のイデエにスピノザ的のものを、此の「歐羅巴のクリシュナ」の至福の痙攣に似たものを、又総じて其の思想の肉体の官能的な甘美な愉悦を、自然律の支配の中での戯れの思想を見て之を愛する事は、大して間違つてはゐないと思ふ。

「秩序の面紗をとほして輝く渾沌の眼」ノヴァリスの云ふ此の渾沌の眼の意味が分らないと、君にだつて、今にだんだん高村君の詩は分らなくなる。（完）

昭和現代詩の鑑賞（抄）

数に於て夥しく、又其の夥しさに比例してそれぞれの意図なり作風なりが實に各人各様の態を示してゐる現在の詩壇から、少くとも一々の詩人の理由とするところを犠牲とする事無しにひとつ概観を得ようと云ふには、私に与えられた紙数は問題にならぬ程僅かだ。さうかと云つて彼等を大まかな類別の中に整理して、それぞれ異色ある傾向群乃至流派として考へる事は実情にも適せず、また出来るだけ「個」を尊重しようとしてゐる私の到底よく為ないところもある。それで私としては、茲に現在活動してゐる若干の詩人を挙げて、紙数の許す範囲内で自分だけの鑑賞をする外は無い。幸に読者諸君の諒解を得ればありがたい。

河井醉茗、北原白秋、高村光太郎には、大正年代から引続き作品の発表がある。彼等は所謂散發的な詩人には属さない。思ひ出したやうに詩を書いて、僅かに詩人の名を繋ぎとめる詩人には属さない。高村は元よりとして、醉茗にしても白秋にしても、未だ詩を書く喜を捨て、ゐないといふ事が分る。殊に醉茗には老来ますます意氣の旺なものがあつて、枯淡のうち、時におのづから鋭い鋒鎌の現れるのをさへ見るのは愉快である。彼は淡淡として滋味のある散文も書くが、やはり詩がいい。最もすぐれた詩になると不思議に厚みを感じ

させる。彼の中では多くの場合年齢から来る諦念と詩人らしい執着とが対立してゐるが、彼があるの根性骨の強さと重厚さとを無くしてしまはない限り、時代との摩擦面から憤然として出て来る詩には傾聴させる物があり、簡単に其の存在を無視させない物がある。

きよらかな比例

——日本詩精神と日本文化史との
関聯についての一つの例証——

私の知人に或るお嬢さんがゐる。亞米利加生れの所謂二世である。もう卒業してしまつたが、両親と一緒に帰朝後は、祖国日本の某大学の専門部で英文学を専攻してゐた。スポーツが好きで、自動車は元よりヨットも操れば馬にも乗る。弓術なども習ひ出すと忽ち上達した。肝腎の日本語も、初めの頃は少し変だつたが、学校を出る時分にはもうすっかり当たり前になつて、今では日本人も日本人、東京生れのどんな娘さんと較べても全く變つたところが無い。

或る新聞に高村光太郎君の「天日の下に黄をさらさう」といふ詩が出た。今では此の「黄」が其のまゝ「黄」となつてゐるが、発表當時はこれに「イエロウ」といふ謊仮名が振つてあつた。私は初めて見た時から此の詩に打たれて、切抜帳へ貼り込んだのをよく人にも読ませた。それで問題の娘さんに日本の詩を読ませる事になつた時にも、まつ先に之が念頭に浮んだ。話を進める為に次に其の全文を引用するから直ぐ分る事と思ふが、いろんな意味で此の詩くらゐ此の娘に適切なものは先づ有るまいと私は固く信じたのであつた。

知つてゐる人も多い事とは思ふが、とにかく現在行はれてゐる其の詩といふのを引いてみよう。

天日の下に黄をさらさう

祖先は川に禊して穢れを祓つた

ただ白木の柱を立てて家を築いた
きよらかな比例そのもののみを命とした
根こどまる塵一つ無、のを

一切の美の極みとした

袖を払つて今わたくしが魂にきくもの
とほく深く又まことに已みがたい

貪婪多彩の文化をくぐつて

世に斯くはかり潔く切なく堅い美が
一つの道とまでなつて興るのを

心ねちけぬ輩は否むま

氷を割つて川に身をそぞき
今こそ天日の下に黄さらさ

(『日本文学講座9 新詩文学篇』昭和九年)

かくすところなくきらけ出さう

臆するところなく育てよう

巷に竹と松とが繁茂する

わたくしは大根をぶらさげて街を歩き

此の道美しけれど絶えず窮乏につづく事を

思ひ

むしろ心たのしい決意にさびしく笑つた

娘は私と卓を隔て、向ひ合ひ、此の詩を書き写して渡した原稿紙を両手の平に載せ、心を清めて静かに読出す私の声をじつと聴きながら、その真剣な瞳を行一行と移して行つた。

腹の底、骨の髓から日本人になつて貰はなければならぬ此の相手。亞米利加西海岸に生れて其處で育ち、祖先から伝はつた血脉を除けばつい最近まで、その生活にしろ思考にしろ、すべてに現代亞米利加の性格を極めて自然に身につけてゐた半ば異邦人のやうな此の同胞。然しやはては日本の家庭をみづから営んで、日本人の母となるべき二十歳の女性。私の心は寧ろ父らしい愛情と薰陶の熱意とに燃えたのであつた。

二度読んで聴かせて私は字句の解釈をした。

私は「禊」と「祓」の何であるかを説き、「貪婪多彩」の意味を分らせながら、序でにたの音の重なる妙味を指摘した。「なぜ大根をぶらさげるんですか」といふ極めて適切な質問には苦笑した。しかし此処が分らなくては不都合だから、私は友人である作者の生活と人となりとの一端に触れた。

字句の解釈はとにかくそれで一応済んだ。

娘も一応は文意を納得した。だが此の短い一篇の詩の中に遍満し、それを貫き、其處に花さき、晴れては曇り、漂ひかをり、ほのぼのと匂ひさへする不思議なもの、眼前に生き動きながら字句解釈の彼方にあるもの、これを少くとも私と同じ程度に分らせる事は難事中の難事と見えた。

考へてみれば此の困難は、困難それ自体の性質から言つて、何も相手が斯ういふ特殊な条件を備へた娘だからとは限らないのである。私の娘にも分るまい。妻にだつても或る処までしか分るまい。いや、確かに分らなかつた。此事は残念だが、もつと範囲をひろげても尚事実らしく少くとも私には思はれる。

上代から今日に至るまでの日本文化の展開への知識、永く生きて来た言葉の歴史、一句を読むや忽ち一つの体験のやうに動き出す其の具象性、又詩術の蒸溜器を通過して初めて加はる言葉の妙味。およそ此種の事柄が作者に近い程度まで分つてゐないと、鑑賞の困難は、分らせる事の困難と共に、これを免れる事が出来ないのではないかと思はれるのである。

「ただ白木の柱を立てて家を築いた」といふ一句をとつても、これを読むと、これを書く時作者の念頭を鮮明に通つて過ぎた一つの古代の像の見えて来る人と、さうでない人との有り得る事は考へられる。「今こそ天日の下に黄をさらさう」にしても同じ事で、これを其のまゝ「黄色人種である自分の皮膚を、今

や誰憚るところもなく世界の太陽の光にさらさう」と解する人もあらうし、又更に一步を進めて、永く人種的に劣等視され、自分達も何となく卑下し続けて来た口惜しい屈辱の歴史への回顧と、其の歴史への痛烈な抗議とを、逞ましい民族的自覚と共にこれに裏づける人もあるだらう。

相手の娘はなぜ「きよらかな比例」と言ふのかと私に訊いた。「正しい比例」といふのは有るが、若しも之を此のまゝ英語に翻訳した場合、それで英語国民に通じるだらうかと訊いた。私は日本語の「清らか」といふ言葉の中には「正しい」の意味が同時に含まれてゐる。清らかなものに正しくないものは無いといふ事を、幾つかの例を挙げて説明した。そして若しも英語国民が此句を正しく分りたければ、日本語の「清らか」の意味を知らなくてはならない。しかし恐らく此の「きよらかな比例」といふ言葉の持つひゞき其のものの美は、到底外国人には分るまいと言つたら、娘も痛ましくらる真摯な面持で「私にもよく分りません」と告白した。

「袖を払つて今わたくしが魂にきくもの」の場合でもさうであった。袖を払ふといふ一つの動作と其の心理的内容とが、此のせつぱつまつたやうな言葉の音楽的効果と同時に感じ取られるのでなくては此句の立派さは分らなかつたであらう。

「わたしとわたくしとは此の場合どのくらう違ふのでせうか」といふ質問もあつたが、これが厳肅な場合だからといふ以上には、私の

娘などにも説明はつき兼ねた事であつた。

「世に斯くばかり潔く切なく勁い美が」の読

方を彼女はむづかしいと言つた。とにかく私は「きよくせつなくつよい美」と読んだのであるが、日本美を言ひ現す簡潔な言葉として、此の場合これほどにも抜き差しならず、適切な言葉を他に求める事は不可能である。其の意味内容の正しさ、其の響きの美しさ、又其の文字の眼に訴へる美にいたるまで、すべて高村光太郎の名にふさはしいものと言はなくてはならない。

一篇の詩をもつて、果してどれだけ此の亞米利加生れの怜俐な、鋭い、又生氣に満ちた日本娘に利益を与へ得たかを私は知らない。たゞ私としては此の試みから一つの貴重な経験を得た。即ち日本には日本特有の詩精神の有る事、そしてそれは日本民族の生活理想展開の歴史に、言葉をかへて言へば日本文化の発展の歴史に実際に深くして且つ遠い根を下してゐるといふ事であつた。

（「知性」昭和十八年一月）

「をださんの詩」研究

（以下は私の覚書のほんの一部を敷衍して後学者のために書綴つたものに過ぎない。独断や解釈の間違ひのあるかも知れぬ事を恐れるが、何かの参考になれば幸である。問題の詩の全篇を引用出来なかつたのは紙面の都合から止むを得ない）

少女に

「君の断髪は君のふりむくたびに
ちよつと君の頬を払つてゆれる。

君はうるささうに頭を振る。

君はその時錦鶲鳥のやうにたのしい」

本統にうるさいのか、それとも幾らかは颯爽たらうとする伊達の仕方かは知らないが、兎に角少女は屢々彼女の断髪を振る。そしてそれが不思議に、今の女の児といふものの魅力の一端を演出する。私もそんな場合に適切な形容を尋ねて久しかつたが、遂にあの金色の冠毛と華麗な羽毛の頸巻とを振る此鳥には想ひ到らなかつた。常に観ること、常に相似相同事象を一見無縁の世界に見て、其処から詩的普遍につながる本質をつかむ事。

「錦鶲鳥のやうにたのしい」の「たのしい」も、此の場合具象的で立体的だ。たゞ「錦鶲鳥」は「錦鶲」だけでいいと思ふ。音の感じも其方が此の一筋の凜とした内容にふさはし

く、又動物学上でも「きんけい」と言つてゐる。

「君は汽車にのると窓から手を出す。
山に登るといちばん高いところに立つて

手をあげてみえないものに合図する」

此の一節最後の行の「見えないものに合図する」は、高村光太郎君にして尚ふらふらと

其の常套を取り上げたやうだ。「ポーズ」と人は言ふだらうか。私は寧ろ「習慣になつた好み」と見る。直ぐ次に

「君の唄は空気の温度を変へるし、

君のだんまりには稻の葉の句がする」

といふやうな勝れた句が続く以上、作者は其処で尚しばらく思をひそめるべきでは無かつたらうか。

私は青年が好きだ

「私は青年が好きだ。

私の好きな青年は木曾の檜の柵のやうに
まつすぐでやはらかで香りがいい。

私の好きな青年は鋼のバネのやうに
しなやかでつよくて弾みがいい。

私は青年が好きだ。

私の好きな青年は朝日に輝く山のやうに
晴れやかできれいで天につづく。

私の好きな青年は燃え上の焚火のやうに
熱烈で新鮮であたりを照らす」

進曲を想ひ、画ならばウイリアム・ブレイク 音楽ならばベートーベン第九交響曲の行

の「悦ばしき日」を想ふ。そしてそれよりも更に短くおもふのは、高村光太郎君の木彫「青年」だ。裸の「青年」だ。

其の「木」といふ材を頭に置いて此詩を読む時、その良さの味は一層こまやかになると思ふ。木曾の檜のしかも「極目」、「まつすぐ」やはらかで香りがいいは、まるで其處にもう其の木彫が在るやうだ。引用第二節の「朝日に輝く山」の比喩は、「晴れやかできれいで」の一句に生き、「燃え上る焚火」といふ素晴らしい聯想は、「熱烈で新鮮であたりを照らす」によつて生動する。此等晴れやか、きれい、焚火、熱烈、新鮮、あたりを照らす等の言葉は、日常普通の用語でありながら、用ひ方によつては是程にも内面から花と咲くのである。趣味の美、肉附けの美。引いては高村君のあの木材のやうに見事な筆蹟をさへ想はせる。作者にとつては恐らく大して重要な無さざうな此詩から、しかし初心者は詩作上最も重要な課業の一つを学び得るのである。

みかきにしん

「にしんに牛蒡をわたしは煮てくふ。

田植の行事、田野におこる。
にしんの甘煮は田植の惣菜。

田の畔でくふ昼食のうまさを
わたしは吾家の卓で味はふ。

しぶく甘く歯ごたへあつて肉はほどける。」

ならばぐつと突き刺しすうと切る。「にしんに牛蒡をわたしはくふ」で、何とそれが甘煮のにしんである事か。画にもかけないとは實に此事でなければならぬ。「にしん」と「煮てくふ」が其のイ行の音の出し方で既に充分にしん的な条件を与へる時に、我等の知つてゐる此のまた「牛蒡」が加はつて、歯も舌も軟口蓋もにしんの反射でもう一杯だ。そこでは知らないが私としては、「六月、水田に水みなぎり」の冷めたい水をコップに一口、ぐつと飲干したいと思ふ程だ。

「しぶく甘く歯ごたへあつて肉はほどける」も、何と密実で丹念な、にしんの身らしい一句であらう。人若し偽善者か木石でないならば、正直な唾液を溜めるがいい。たとへ君にして今は入歯の口であらうとも、条件反射に嘘は無い。

然し此等の句に続く

「にしんの句、卓上をこめ、
わたしは農家を思ひ、又北洋を思ふ。

北洋漁場の難問題に

生死をかけて船を出した

あの同胞の悲壯を思ふ」

は、たとひ何かの都合で書いたにしても、どうも白玉の微瑕たるを免れないやうだ。少くとも此處に五行の句を欲しいならば、高村光太郎君たるもの、あくまでもにしんで通すためにもう一工夫欲しかつた。

にしんでは「難問題」必ずしも当らず、従つて「同胞の悲壯」が浮いてしまふ。「あの同胞の悲壯」の「あの」も、(私だけかも知れないが)、さう言はれ、ばさうのやうでもあり、さりとてそれほど痛切には知つてゐないやうな気がして、一寸不安を感じるのである。

供木のことば

「今この木に斧をいれます、伐ります。

思慮深かりし昔の人のおん魂も照覧あれ国家非常の日にあたり、

海の国日本には一艘でも多くの船がいります。

船、船、船がなくては一億が窒息します。海といふ海へ無数の船をうかべて縦横無尽にいま戦はねばなりません。

その船の龍骨となり橋となり

その船の船桁となり板子となる木が何を措いても即刻ります。」

此の詩の朗説をラジオで聴いた時、同じ詩を作る者である私が、今更のやうに此の作者の大に打たれた事であつた。何百年家に伝はる杉櫻に、斧を入れ鋸を當てる者の其の祈りの心を、かくまでさながらに切実に、人は書き得るものかと思つた。此の二十六行の詩に事をきはめ理をつくして、しかも雄弁の俗に墮ちない静けさと神妙さ。それは何処から来る。総じては内からの促しで此の言葉を発せずには居られぬ人間に、作者が成り切つてゐる所から来る。それは心理的に見れば、主として句のせつせつたる段落から来る。「斧を入れます、伐ります」此の短い「ます」の切

れが、祈りの、願ひの、切なる表現の自然なものである。劈頭の此の一句がふと脳裏をよぎつた時、既に此詩は輪廓を得たのであらう。

作者は其處で客を謝し襟を正して、肅然座に直つたであらう。もろもろの形象はその瞑目の眼前を流れ、一つの祈りに帰らんが為につましやかに彼の取るに任せたであらう。

彼は肚に動かざる温水を湛へ、寧ろ虚窓の下おのづからなる營みのやうに此の一篇を物したであらう。玉のやうな質は凡そこんな境地から生れたものと思はれる。

引用した一節に「今」といふ言葉が二つある。第一の「今」は劈頭の動かし難い落想に属するものだから茲に考へないが、第二の「今」の在り場所が其の一の勢から見て、どうしても「縦横無尽」の次に来なくてはならなかつた事を知らなくてはなるまい。然も音に語勢からのみでなく、此の「今」は絶対に必要な「今」である以上初心者はこんな处からも学ぶ事が出来るのである。最後の行の「何を描いても即刻ります」の「即刻」にしても同様に、抜き差しならぬ言葉の在り場所とは実にこんな場合を指すのである。

青天に酔ふ

「四方八方こんなに好く晴れ渡つてしまつてはあんまりまぶしいやうで氣まりが悪いやうだ。

十国峠の頂上にいま裸で立たされてゐるやうだ。

頭のまゝへにのしかかる巨大な富士はまるで呼吸をしてゐるやうに岩肌がひかるし、

右と左に二つの海が金銀の切箔(きりは)をまきちらしてゐるし」

話法の妙は由来高村君の詩の一特色をなし得るが、これも其の適切な例の一つである。

「晴れ渡つてしまつては」の「しまふ」や、「あんまりまぶしいやうで」の「あんまり」、

東京方言の大胆で自然な駆使と言へる。大胆だと言ふのは此の「しまつては」が必ずしも

「晴れ渡る」の現在完了形ではなくて、「どうもかうすつかり晴れられては」の意味を現すどつちかと言へば江戸つ子方言であり、「とかなんとかいつちやつて」の「ちやつて」にも近い俗語の親類だからである。しかもそれが此處では極めて自然で、「あんまり」だの「氣まりが悪い」といふやうな氣楽な言葉を呼出す機縁ともなつてゐるのである。「まぶしいやうで、氣まりが悪いやう」で、「裸で立たされたるやうだ」の「やう」も、此の晴天に寧ろ「酔つぱらつた」氣持の表現に有力な寄与をなしてゐる。然し呼吸をしてゐるやうに岩肌を光らせてゐる巨大な富士を認めては、作者と雖もさういつまで俗語に低徊してはゐず、忽ち「金銀の切箔(きりは)をまきちらして」といふやうな素晴らしいイメージを惜し気もなく拡げて見せる。此の一句の音と聯想とから来るきらきらした海の再現には、覚えのある者ならば敬服せずには居られないだらう。

枯芝の句の中に身を倒すと
ゆらゆらとあたり一面の空気がゆらめき
白いペンキ鮮かな航空灯台も四十五度にかたむき、

青ダイヤの竜胆(りんどう)がばつちりと四五輪

舞台はすっかり十国峠の草原で、読みなが

ら身は秋晴の太陽と風に、どつぶり漬かつて睡いやうだ。それにしても「青ダイヤの竜胆

がばつちり四五輪」とは何たる驚くべき表現だらう。清涼が其處から吹いて来るやうだ。

それを秋晴の富士に残雪は無いし、さりとて五合目だけに新雪とはおかしいし、一体「青ダイヤの竜胆」とは何だらうなどと、変に穿鑿するのは此の場合迂愚と言はなくてはならない。

一切を描き得て無に終らんよりも、一頓悟を下して真に徹する。これが詩であり芸術である。ミケランジェロはモーゼの頭に角を生やした。

（「詩研究」昭和十九年九月）

尾崎喜八とフランスの作家たち

— 喜八宛書簡を通して — その四

中原好文

喜八宛ヴィルドラック書簡（3）

前回に続き、本号でも、喜八宛シャルル・ヴィルドラック書簡を紹介する。一九二七年（昭和二年）に喜八宛に送られた三通の書簡である。

（その6）

〔宛先その他〕封書。シベリア経由。左上角に「（パリ）六区セーヌ街十一番地 12, RUE DE SEINE (VI^e)」の刷り込みのある専用私製便箋使用。宛先は日本東京府豊多摩郡上高井戸原尾崎喜八様。

〔発信地〕パリ。消印には「PERES (サン=ペール街局)」の文字と「27 (一九二七年)、18 (十八時?)」の数字が見える。封筒裏上部に「パリ六区セーヌ街十二番地シャルル・ヴィルドラック」の書き込みがあり、封緘部には、図案化したCV（名と姓の頭文字）を丸で囲んだ印鑑が捺されている。

モザの木々に面していたからで、親愛な尾崎喜八の手紙を読むのにこれ以上優しい朝の時間を見ることはできなかつたでしょう。すぐには返事を差し上げなかつたのは、すでにパリに帰る準備に取りかかつてゐたからで、パリには二日前から戻つております。それにまた、パリから返事を差し上げる方が好都合だつうと思つたからです。ここからだと手紙はシベリア横断鉄道で行く便宜がありますが、サン=トロペからだとマルセイユに送られ、そこからまた長い航海を余儀なくされるからです。

たまたま今日また、デュルタン、デュアル、それに私宛のお葉書押受いたしました。デュアメルとデュルタンは、現在連れ立つてロシア訪問中にて、お葉書をすぐに渡してしまうことはかないません。一週間後には戻るだらうと思います。

親愛なる友よ、あなたは冷ややかで心なき同国人のことを嘆いておられますか、悲しいかな、人間の稟質というのはどこへいっても偉大なものではありませんし、何らかの熱意や信仰に燃える者はどこでも多く少数に過ぎないのだということをはつきりと信じるべきです。だからこそそのような人々は互いに知り合う必要があるのであり、互いに知り合うことの歓びもまた大きいのです。

身内にお亡くなりになられた方々やご病気の方がおられた由、またいろいろと煩わしいことがあられた由、皆してひじょうに心を痛めております。しかし幸いにもあなたご自身

一九二七年四月一日

親愛なる尾崎

素晴らしい、そして感動的なお手紙、数日前に拝受いたしました。私は一人でサン=トロペに来ており、妻がパリから回送してくれたのでした。一ヶ月間独り閉じこもつて、執筆中の新しい戯曲を書き進めようと思つたのですが、かなり骨の折れる仕事です。南仏の美しい春の中でお手紙拝読致しました。といふのも部屋の窓が花の咲いたアメンドウとミ

は、健康と、愛と、若さと、望み得る最良の家庭に恵まれ、そこにはかわいらしい栄子がいて、間もなく弟さんか妹さんが生まれて来るのであります。

妻は栄子に小さなフランス人形を送るつもりであります。またそれと一緒に何種類かの顯花植物の種子をお送り致しましよう。多分それは日本では知られていない種類のはずですが、あなたの庭では大変よく育つだろうと思ひます。種子については短い専門的な説明文を書いてお送りします。

サン・トロペにいた時、私はある日、海岸の砂浜で朝の食事をしたためた後、あなたが女友達のセシール・ペランに当てた手紙を読ませていただきました。彼女は詩人ですが、その最初の夫のジョルジ・ペランもひじょうに優れた詩人であり、また素晴らしい私の友人でもありました。ペラン夫人はジョルジ・ペランの詩集一冊、それに彼女自身のもも一冊お送りしたいとのことです。ジョルジ・ペランはひじょうに鋭く深い感受性に恵まれた詩人でした。もし会つていれば、あなたも必ずや好きになつたであろうような人でした。私たち皆の友だつたのです。そんなわけで近々彼の本を一冊お受け取りになられるはずです。

お話を小著『物語集』お送りいたします。

これはある出版社が、このところ当地で物凄い流行をみせている限定豪華本の刊行熱を満足させるために私に求めてきた、こくささやかな選集です。愛書狂達のために、美麗紙に

木版画入り、一二三百部印刷の小作品が刊行されるわけです。ごくささやかなこの書、『物語集』には、「ヨーロッパ」誌に掲載された物語『青年時代』と他に二篇、類似の、しかもこれほど重要なさきやかな物語が含まれているだけです。わが甥よ、私の本は決して買つてはなりません！ 私が送つてあげますから！

いや、違います。デュアメルの『歓びと戯れ』はサン・トロペではなく、パリ近傍のヴァルモンドワで執筆されたものです。デュアメルが当時住んでいた家もヘメゾン・ブランシユ（白い家）と呼ばれていたのです。

今日はそれほど長く書くつもりはありません。と申しますのも、あなたが求められておられますように、いわば（即座に）お手紙の返事をしたためたいと思うからです。その代わり、あなたにヴィルドラック家の家族全員と再会していただくために、あるいは全員をお知りいただきるために、写真を何枚かお送りしたいと思います。

デュアメルの写真も二枚同封いたします。でもこれはいわば間に合わせのものです。後日もつとよいもの、つまり顔のこれほど小さくないものをお送りしたいと思いますから。写真の一枚は、ヴァルモンドワの街道で写したもので、それは春が訪れる度にデュアメルと私の移り住むところです。パリから三十キロほど離れていて、緑がひじょうに多く、爽やかな小谷の中になります。デュアメルは妻であり、私の義理の妹にもあたるブランシ

ユ・デュアメルと一緒にですが、彼女は素晴らしい女優であり、デュアメルのほとんどすべての芝居に出演しております。また、フランスで最も見事に詩を朗読することができるほど重要なさきやかな物語が含まれているだけです。わが甥よ、私の本は決して買つてはなりません！ 私が送つてあげますから！

ユ・デュアメルを一緒に写つておるのは、『歓びと戯れ』であなたもすでにご存知の、上の息子のベルナールです。

もう一枚の、デュアメルが一人だけの写真是、ヴァルモンドワで彼の住んでいる家の一角で写したものですが、これは以前のヘメゾン・ブランシユ（白い家）ではなく、ヘヌー・ヴェル・メゾン（新しい家）と呼ばれている方の家です。

あなたがすでにデュアメルを描いたそのクロッキーをご覧になつて、ベルトルド・マーンは私たちのひじょうに親しい、旧くから友人です。彼は私たち仲間全員のデツサントやクロッキーをたくさん描いていますが、その複製を何枚かお送りいたしましょう。中でも、彼が描いたデュルタンのポートレートの一枚とバザルジエットの一枚、のそれにまたアルコスとジャン・リシャール・ブロックの一枚はとても見事なものです。

ベルトルド・マーンには、あなたの手紙は全部読ませ、あなたのお話はすべてしてありますので、あなたのことはよくご存知です。

ロシアから戻ると、デュアメルはすぐにも

ヴァルモンドワに行き、春と夏の間にそこにち着くことになるでしょう。私も五月にはそ

こにまいります。というのはパリで落ち着いて仕事をするのはとても困難だからで、いろんなことに気をそらされ、余りにも多くの人と顔を合わせざるを得ないからです。ヴァルモンドワからパリへは、お宅から東京へ行くのと同じぐらい早く出られます。

親愛なる尾崎、どうか上田、今井、片山に私の心からの友情の挨拶を送るとともに、彼らの温かい友愛の情に対する私からの謝意をお伝えください。私は上田のアドレスも今井のももつていません。倉田、吉田、高村、および倉田にも宜しく。皆恙なきよう祈つております。

パリに戻つてから、アルコスにもバザルジエットにもまだ会つていませんが、今度会う時、あなたの伝言を申しつたえます。親愛なあなたのロマン・ロランが、ベートヴェン没後百周年でウイーンに行き、そこで講演をして、聴衆の喝采を受けたことはご存知でしょうか？

あなたの新しい写真をいただけたら幸です。また実子と水野久枝の写真、それにあなたにも可愛らしい小さな栄子の写真をいただけたら私も嬉しく思います。

奥さんと義妹さんに二人がお書きくださつた愛情のこもつたお便りと、お二人の思い出がどれほど私たち、妻と私とを感激させたかをお伝えください！ 必ずや私達はお二人に、そしてもちろんあなたにお目にかかることがで

きるでしょう！ あなたがたをパリのすべての仲間たちに紹介し、多摩川べりで私たちがしたように、セーヌ川かオワーズ川の岸辺を散策するというのは何という夢でしようか？

私たちがあなた方の生活の仲間入りをしようと努めているように、せめて私は、あなた方が私たちと生活を分かち合うことができるよう、できるかぎりのことをいたします。ではまた、親愛なる尾崎！ 私たちはあなたとあなたのご家族のことを思っています。心からあなたの手を握りしめます。あなたの叔父にして兄なる

シャルル・ヴィルドラック

(その7)

「宛先その他」(封書入り絵はがき一枚)封書の表には、「東京府・豊多摩郡・上高井戸・原・尾崎喜八様」という、ヴィルドラック自身の手によるローマ字書きの宛名のほかに、「府下豊多摩郡上高井戸原尾崎喜八様」という漢字書きの宛名が記されている。切手も消印もないのに、文中で言及されているように、

尾崎家への土産の品と共に、この封書自体も、

「川島さん」の手で、尾崎家に直接届けられたものと思われる。従つて、漢字書きの宛名の

方は、「川島さん」の手によるものであること

〔絵葉書（2）〕

私はあなたがお送りくださつた、ロマン・ロランの友の会全員のサイン入りの何枚かの葉書に、とても心を打たれました。私が今も鮮明にして生き生きとしたその思い出を抱き続けているこれら親愛なる友らに、どうか、

絵葉書の写真は（1）枚目、（2）枚目ともサン・トロペの旧港風景を写したもの。

〔絵葉書（1）〕

親愛なる尾崎
久しぶり以前からお手紙を差し上げようと思

いながら、ご無沙汰のまま、当地で非常に忙しい三ヶ月を過ごしてしまいましたが、取り分けそれは私の日本旅行に関する小著執筆のためでした。この小著は、暫くしてから出版

しようと思つて、いる別な大著の一部に過ぎません。この小著のなかで、私はあなたについて、そしてあなたと私の友情について語っています。パリに戻つてからもつと長いお手紙をしたためます。今日はただ、川島さんの帰国に便乗して、あなたへの短信と、また、もし彼がお引き受け下さるならば、ヌガーを少しと、サン・トロペの特産品をあなたの奥

様と義妹さんに託そうと思つたのでした。お二人は妻が昨年の冬にお送りした小包をお受け取りになられたでしょうか？ それにはお嬢様への小さなおもちやがいくつかとハンカチが何枚か入つていました。私たちはその小包が届かなかつたのではないかと心配しております。また、あなた宛ての私からの手紙と何枚かの写真をお受け取りくださいましたでしょうか？

サン・トロペ、二七年九月二十七日

私からの友愛の気持をお伝えください。近々、あなた宛てに『絶望者の歌』の最新版をお送り致します。

これには私が新たにつけ加え、あなたがまだこ信じない何篇かの詩が含まれています。

私はあなたがシベリア横断鉄道でフランスへの旅をする様を心に思い描いています。フランスで一ヶ月過ごすには、日本を一ヶ月間留守にするだけで充分なのです！研究旅行のための、日本政府からの給費を得る手だてはないのでしょうか？　パリでは、私の家に住めば良いのです。

それは遠からぬ将来のこととして考えてみなければなりません……。

親愛なる友よ、近々、短信ではなく、正真正銘の長文のお手紙を差し上げます。パリには十月の五日に戻りますから。

妻と私は、あなたとあなたのご家族の皆様に心をこめたご挨拶をお送りいたします。もうすぐ一番目の赤ちゃんが生まれるので、ね？　赤ちゃんと美しく可愛い栄子が健やかでありますよう心から願っています。

友愛の気持をこめて、あなたの友

シャルル・ヴィルドラック

(その8)

「宛先その他」絵葉書。写真裏面の説明書きは "Vue panoramique de la cité, l'Institut et le Panthéon." つまり、「シテ島遠望 学士院とパンテオン」。学士院の右手後方に、ヴィル・ド・ラックによる矢印の書き込みがある。絵葉

書の入っていたと思われる封筒は見当たらぬ。い。

【註解】絵葉書の写真は、説明書きにあるように、左手に南北両塔を頂いたノートル・ダム寺院とシテ島の遠望。寺院正面の手前に、島を跨ぐ形のポン・ヌフ橋 (Pont-Neuf) は、文字通り、(新・橋) の意味だが、それは創建当時の話で、セーヌ川にかかるパリ最古の石橋)、その手前、つまり下流にポン・デ・ザール橋(芸術橋)、そして一番手前にカルーセル橋が写っている。画面中央、ポン・デ・ザール橋の右の袂に接してフランス学士院の建物のクポール(丸屋根)があり、その右手後方に、ヴィルドラックの手で矢印が書き込まれている。パンテオンのクポールは画面の右手奥にそびえている。ヴィルドラックが当時住んでいたセーヌ街は、学士院のあるマラケ河岸通りとトゥールノン街を結ぶ八百メートルほどの街路で、その十二番地は学士院に程近いところに位置している。彼の喜八宛て書簡の大半がその郵便局から投函されているサン・ペール街は、ボナパルト街を挟んでセーヌ街の西側にあり、三〇年代に入つて彼が移り住むグルネル街(三四四年、喜八宛ての最後の手紙が書かれるのは、その九十六番地からである)は、このサン・ペール街とラスパユ大通りを結ぶ小さな通りである。

この絵葉書の写真上に小さな矢印をつけて、私の住んでいる場所を示しています。セーヌ街は河岸通りの近く、フランス学士院(アカデミー・ランセーズ)の裏側にあります

が、二の印をつけたのがその建物です。左手の一番奥またところにあるのが、ポン・ヌフ橋を前に控えたシテ島とパリのノートル・ダム寺院です。

時々はお便りをお寄せください！

間もなく小冊子をお受け取りになられるはずですが、私はその中で、あなたとあなたの友人たちと共に過ごした素晴らしい一日について語っています。

妻と私は「蒼天居」の皆様全員に心からの友情のご挨拶をお送りいたします。

友愛の気持をこめて あなたのの
シャルル・ヴィルドラック

(その8)

「宛先その他」絵葉書。写真裏面の説明書きは "Vue panoramique de la cité, l'Institut et le Panthéon." つまり、「シテ島遠望 学士院とパンテオン」。学士院の右手後方に、ヴィル・ド・ラックによる矢印の書き込みがある。絵葉

親愛なる尾崎

あなたと、親愛なるあなたのご家族の皆様

パリ、二七年十二月

一年のできごと

平成十一年八月～十二年十月

「富士見に生きて」碑前の集い

平成十一年八月二十九日「第20回尾崎喜八碑前集い」於諏訪郡富士見町コミュニティ・プラザ。夏には珍しく快晴の空に山々がくつきりと見えるよい日であった。碑前の献花を終えた後、会議場で川嶋利哉氏の碑文の朗読、堀隆雄氏のお話、続く教育委員会主催の詩のフォーラムの後、基調講演は昭和初期尾崎と交友のあつた詩人福田正夫氏のご息女福田美鈴さん（福田正夫詩の会・同人誌「焰」主宰）の「尾崎喜八と井上康文」であった。尾崎と詩人井上康文との生涯かわらぬ交流について語られ、戦後富士見に来たばかりの時期に尾崎が井上氏に送った手紙の朗読も含めて感銘深いお話を伺った。

みずならの会・田舎のモーツアルト碑前祭

十一年十一月五日～七日、第12回みずならの会は大糸線穂高駅集合。まずガストホーフたかはしに高橋達郎氏を訪ねる。高橋氏所蔵の詩の半折「安曇橋」、色紙「常念岳にて」等を話を聞き乍ら拝見した。昼食後大町方面に車で向い、鷹狩山の展望台から雪をつけた白馬連山、鹿島槍を始め遠くの山々まで一望おさめる。天気は快晴、秋が遅かつたため里山の紅葉は盛りであった。夜は宿で安曇野・美ヶ原等の作品を皆で読み感想を述べ合う。六日朝9時から安曇野の町立穂高中学校で生

徒会企画主催の「田舎のモーツアルト」の碑前祭及び音楽祭が行われるので全員で参加した。講堂の舞台一ぱいの大きなスクリーンには尾崎が訪れた頃の旧校舎、「田舎のモーツアルト」碑建立除幕式の光景、奥穂高を背景に上高地で撮った尾崎の肖像写真、詩「田舎のモーツアルト」「安曇野」等が写し出されナレーションで説明される。尾崎の詩の朗読が流れる。講堂には千人近い生徒が着席していく近頃珍しいマンモス中学校の様子が窺われる。遺族の挨拶の中で、今はあまり使われない孜々としてという言葉の持つ意味の大しさを説明し「是非今日はこの言葉を覚えて帰つて下さい」と結んだ。碑前祭の後「田舎のモーツアルト音楽祭」が開かれ、日頃ピアノやヴァイオリンを習っている生徒達の演奏が行われた。バッハのドッペル協奏曲（ヴァイオリン合奏）・ベートーヴェンのピアノソナタ・ドゥビッシーの「月の光」等10曲、最後はモーツアルトの「レクイエム」より「涙の日」によつて締め括られた。隣りに腰掛けられた高橋達郎氏とともに何度も目頭を押えたが、それは、「外は秋晴れの安曇平……」澄んだ空は巻雲の饗宴、いちよう鮮やかな黄に、隣りの碌山美術館を囲むかえでの見事な紅葉、正面に聳える常念、子供たちの一生懸命の演奏、三十数年前に尾崎が体験したのと同様の感動に我々も胸打たれたのではないかと思われた。

名、幹事役石田二三夫氏。

蠟梅忌

平成十二年二月五日、東京青山の青山荘で行われた。お話は北川太一氏の「尾崎喜八と高村光太郎」。大変貴重なお話だったので次回の17号の特集尾崎喜八と高村光太郎後編には非ご執筆いただきたいと思つてゐる。野本元氏に再度オーヴエルニユ紀行をお願いし、スマイルドの映写も加えてのお話。立食の後半では松本弘子さん・牛尾孝氏の校歌について、群馬県万場の新井正治氏から今春建立予定の句碑の説明があつた。富士見の河角志づ子さんが好きな詩として「妻に」を朗読、凡らく蠟梅忌に出席出来るのも今回限りではないかと思われる九十四歳の尾崎実子にとって有難い贈物であつた。今まで蠟梅忌は主として尾崎を偲ぶ会であつたが、今回幹事さんにお願

走る。美ヶ原熔岩台地の碑の前に立てば快晴の空は美しい巻雲の祭典、四方の山々も懐かしく碑前で最高の昼食の時を過す。夕食のあと最近フランス、オーヴエルニュ地方に旅行された野本氏から尾崎憧れの地の話を伺う。七日朝、人気のない穂高中の碑を再度訪れる。そのあと隣町の豊科へ、幹事が事前に手配ずみの豊科高等学校に校歌の伴奏付樂譜のコピーをいただき全員で訪れる。校歌作成時の尾崎自筆の原本、校長に送つた封筒に至るまで大目に額に納められたものを拝見、各自にこれらのコピーを用意して待つて下さつた。今回は沢山の尾崎直筆の碑や書・色紙等に接する事が出来た旅であつた。参加人員29

いして研究会会員の資料収集や整理・発表の様子を展示やお話を参加の皆さんにお伝えするコーナーを設けさせて戴く事にした。

参加人員52名。幹事は野本元氏・杉本賢治氏。

三月十八日高橋達郎氏逝去

四月八日穂高町にて葬儀。尾崎が昭和二十一
年富士見村に流寓して以来の友人であり、そ
のエッセイにも度々登場して来た方だが、尾
崎没後も明月院の墓碑を作る時には石・レリ
ーフすべてを手配用意して下さり、田舎のモ
ーツアルト碑建立にも力を貸して下さった。

葬儀には研究会会員の方も十数名参列した。
神流川河川敷の公園に句碑建立

四月十六日、万場町永友会の方々の手で句碑
「父不見御荷鉢も見えず神流川 星ばかりな
る万場の泊り」が建立された。橋を渡り川に
臨んだ公園に、そこからは見えない御荷鉢山
の方に向って建っている。セレモニーの後町
の関係者と永友会会員の夫妻と参加した研究
会会員12名のみで碑前にごさを敷き車座にな
つて祝賀の宴をひらいて下さった。

第12回みずならの会

六月九日～十一日。十年振りの上高地行き。
「尾崎と上高地」を味わう為に雨に降られる
のは覚悟の上でやはり六月初旬を選ぶ。初日
は雨、二日三日は曇りだが幸い穂高や焼岳は
姿を見せていた。田代池往復、徳沢往復とコ
ースは定っているが健脚組は焼岳登山を試み
た。今回も花は同じ場所に群生し、小鳥達も
まだ新緑の装いの樹々の間に歌をきかせてく
れた。宿も五千尺ロッヂ、尾崎と共に行つた

時と同様のもてなしを受ける。五千尺旅館の
本館には「懸巣」の額、ロッヂと食堂には「大
空の青にそばだつ槍穂高」で始まる詩の額が
かかげられていて、改めて詩やエッセイを輪
読したりする必要もなく感じられ、ただただ
上高地の自然を味わつて帰途についた。参加
者24名、幹事役は堀隆雄氏。

「富士見に生きて」碑前の集い

八月一十七日、第21回碑前の集いは献花の儀
式に始まる。第一部は会議室の会場に入り富
士見在住の画家小林政絵氏による碑文朗読、
富士見町本郷中学の教頭で詩作もされる日向
力氏のお話、第二部の詩のフォーラムの後、
国学院大学の教授傳馬義澄氏により「尾崎喜
八音楽と祈り」の講演が行われた。詩と音
楽の関係、詩「若い白樺」「言葉」「新しい絃」
「存在」について尾崎の内面に触れ、最後にエ
ッセイ「バッハへの思い」の中からヴァイオ
リンソナタ第五番へ短調に対する尾崎の思い
を読み、そのラールゴをCDで聴かせて下さ
ると言う大変充実した講演をして下さった。

穂高中学校閉校記念音楽祭

穂高町立穂高中学校は生徒数増大の為一旦閉
校し、来年度から東・西の二校に分れて新し
く出発する事になった。十月二十二日その閉
校記念音楽祭が行われた。新聞報道によれば
（音楽祭は）一部構成。第一部は「田舎のモー
ツアルト音楽祭」と銘打った音楽会。昨年に
続き「回目。同校ゆかりの詩人尾崎喜八の詩
「田舎のモーツアルト」にちなんだ音楽祭で
幕を開けた。「中学の音楽室でピアノが鳴つ

ている…」の書き出しで始まる学舎の情景を
思い描きながら生徒のピアノ演奏などが次々
に披露された。第一部は全校生徒千二十九人
にプロソリスト、教職員、地域の有志らを含
めた千二百人によるベートーヴェン交響曲第
九番ニ短調の第四樂章の演奏が行われた。>br/>参加者便りへ…自分の詩が機縁となつて、
母校の大きな節目に、孜々としてベートーヴ
エンを歌うこの姿を尾崎さんがご覧になつた
ら、またどれほど熱い感動の涙を浮べられた
か想像に難くありません。これまで聴いた第
九の中でもとりわけ胸を打つものでした。>br/>ホームページ「尾崎喜八文学館」堀隆雄氏

尾崎喜八の詩を読んでみたいと思つて下さる
方がいても、現在市販されている詩集は一冊
もないのでもどかしい思いであつたが、堀氏
が著書の詩集からすべての詩を入力するとい
う大仕事を完成して下さった。是非「尾崎喜
八文学館」を検索して下さい。

『音楽への愛と感謝』再刊
二〇〇一年初頭に平凡社ライブラリー版にて
刊行される事になった。

（尾崎栄子）

尾崎喜八資料・第十六号
二〇〇〇年十一月一日発行・非売品
ISSN 0911-3339

発行 尾崎喜八研究会

鎌倉市山ノ内一九七一五（〒247
006）

電話 ○四六七一三三一一七六一

振替 00270-2-33012 尾崎喜八研究会
印刷 住友出版印刷株式会社